
勝手に私訳『寶達問答報応沙門経』

阿傍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勝手に私訳『寶達問答報応沙門経』

【Nコード】

N0976G

【作者名】

阿傍

【あらすじ】

興味のあつたお経を勝手に訳して小説化してみました。元の内容はできる限り盛り込む努力をしますので、興味のある方はどうぞ！

仏説仏名經卷第一 大乘蓮華寶達問答報応沙門經

菩提樹の華が、ぽとりと落ちた。

ざわり、と、場がざわめく。

菩薩、

比丘、

比丘尼、

善男善女、

天竜、鬼神に至るまで

その日、摩竭道場には種々の衆生が世尊の元へと集っていた。草木といえど、世尊の前では喜びに光り輝くものである。まして、世尊の心を知る菩提樹の華が、世尊の前に光を失い、散り落ちることとはその場に集った衆生の心をざわめかせた。

世尊は、静かに散り落ちた華を見つめている。

不安が、さわさわと場に広がる。

世尊の横顔に、明らかな憂いの表情を見て取って、寶達は立ち上がった。

本来なら、寶達はこのように心に心を乱してよい立場ではない。菩薩の位にある寶達はこのような時、衆生を安堵させるべき立場にあるのだから。しかし、世尊が浮かべた憂いの表情は、寶達をひどく不安にさせた。

「世尊

呼びかけると、世尊は静かに憂いを帯びた顔を彼に向けた。

「世尊。何故、その華は枯れ落ちてしまったのでしょうか。常にはあれほど世尊の来迎を喜び、光り輝くように咲く菩提樹の華が

世尊は悲しげな顔をした。

「寶達、この華は憂いているのだ。」

「何を憂いることがあるというのでしょうか。世尊の来迎を仰ぎ、この地には静寂が満ちているというのに、この菩提樹の華も、そして世尊も、一体何を憂いていらっしやるのです。」

世尊は答えず、再び土に汚れた白い華に目を落とした。

「世尊。」

さわさわとした不安が、その場を占めていくのを感じて、寶達は再び呼びかけた。

「皆、不安に思っております。どうか、私達に菩提樹の散った理由を、そして、世尊の憂いの理由を、聞かせて下さい。」

世尊が、寶達に悲しげな顔を向ける。

寶達の不安が増す。

「皆、聞きなさい。」

世尊が、集う衆生に向かって言った。

その顔は光り輝くようで、その身からは後光が射している。しかし、その表情は沈んでいた。

「この菩提樹は、私の心を知って落ちたのだろう。私が憂いているのは、沙門達のことだ。」

そう言って、世尊は種々の衆生たちを見回した。

「お前達は知らぬかも知れないが、このところ道を説くべき沙門の身でありながら悪業を作り、苦処へと堕ちて行く者たちが後を絶たない。私はそれを憂いて菩提樹に向かい、菩提樹はそうした私の憂いを知って、その純白の華を落としたのだろう。」

そう言って、世尊は顔を伏せた。

世尊の悲しみに沈む様子を見て、寶達は少しばかり戸惑った。悟りを得た身に、そのような憂いは、既にないものと思っていたからだ。

「世尊。」

寶達は、三度呼びかけた。

「お願いいたします。我々に、世尊が憂いる悪業を為した沙門達が、どのような苦しみを受けているのか、お聞かせください。」

世尊の、憂いを含んだ目がじつと寶達にそそがれる。何がそれほど悟りを得た身を憂いさせているのか　寶達は、知りたかった。

世尊の目が寶達を離れ、遠くを見つめる。

遠く広がる世界は穏やかで、どこにも憂いの種などないように見える。

しばらくそうして、世尊は不意に寶達を呼んだ。

「寶達よ。」

呼ばれて寶達はびくりと世尊に向かう。

「寶達よ　東方に、鉄围山と呼ぶ大山がある。その山中に日月もこれを照らさぬという、幽冥の地があり、これを名付けて地獄と言う。」

悲しみを含んだ世尊の声に、寶達の背が栗立った。

「寶達、この獄中で悪業を為した沙門達が罰を受けている。その有様を説くは易いが、私が今、それを説いて聞かせたところで、お前にも、ここに集う者たちにも、私の憂いは本当には解らないだろう。」

世尊は、寶達の曇りのない瞳をじつと見つめて言う。

「真実、私の憂いる理由を知りたいと思うなら、寶達よ。そこへ行って、彼らがどのような因縁で悪処に堕ち、どのような苦しみを受けているのか、その目で見て来るがいい。」

すつと、身体の心が冷えるような気がして、寶達は世尊に不安な目を向ける。

世尊は寶達を見つめている。その澄んだ瞳は、寶達が世俗の穢れを知らぬことを物語っている。

世尊は知っている。欲に屈した沙門達の哀れな末路を今の彼に説いても、彼はその本当の悲しさを、理解しない。

「世尊」

寶達が、不安げな顔で呼んだ。

「お言葉ですが、私にはそのような力はありません。私の力では、その幽冥の地に辿り着くことはできないでしょう。」

寶達の言葉に、世尊は、ふ、と微笑んだ。

「案ずることはない。寶達、お前に私の力の一部を与えよう。今すぐにも東方、鉄囲山へ赴くがいい。」

世尊の言葉とともに、寶達の身体がふわりと中に浮いた。見ると寶達の足元には、美しい寶蓮華が花卉を広げ、寶達はその中央に立っていた。

「その蓮華は、お前を自在に運んでくれよう。寶達。往っておいで。」

世尊は静かに微笑んでそう言った。

寶達は世尊に一礼し、心に鉄囲山を念ずる。

ふわりと蓮華が高みに上った。

「ごう、と風のなる音が聞こえ、寶達の乗る蓮華は、龍が行くように虚空を飛び、東へと向かった。」

やがて寶達の足元に、切立つ険しい山々が見えた。

これが鉄囲山かと、思う間もなく寶達の乗る蓮華は、その峻険な岩山へと吸い込まれるように下りて行った。

落ちるような急降下に、寶達は思わず目を閉じた。叩きつけられるかと思う頃、蓮華座は静かに止まった。

寶達はそつと目を開け、息を呑んだ。

「なんというところか」

思わず、寶達は呟いた。

高峻な岩山には、見渡す限り草木の姿も見えず、薄闇に覆われたその地は、確かに日月も照らすことはあるまいと思われた。

「失礼ながら、菩薩様とお見受けいたします。」

不意に声をかけられて、寶達は振り返った。

見ると、寶達の前に大勢の者達が控えている。

「あなたがたは？」

問うと、一人が進み出て言った。

「我等はこの地、地獄を預かる三十六王にございます。高位の菩薩様とお見受けいたしますが、何故にこのような苦処へ御下りなされたのでしょうか。」

丁寧な応答に、寶達は少しばかり慌てる。寶達はそのような礼を執られるほど高位の菩薩ではない。少なくとも、自分ではそう思っている。

だから寶達は慌てて言った。

「どうぞお手を上げて下さい。私は王様方にそのようなお氣遣いをいただくほどの者ではございません。」

「しかし」

大智尊王と名乗ったその王は、さらにかしこまる。

「しかし、そのように立派な蓮台に乗られ、速やかに降り立たれたお姿は、並みの菩薩様とは思われませぬが。」

大智尊王の言葉を聞いて、寶達は顔を赤らめた。

「これは、世尊のお力に拠りますもの。私の力ではございません。」

世尊の名を聞いて、王達はざわりとざわめいた。

「これは 高位の菩薩様とは存じましたが、世尊のお力添えで参られた方となれば、一層粗略に扱うわけには参りませぬ。一体どのような理由で、このような幽冥の地においで下さったのでしょうか。」

三十六王に礼拝され、寶達は困った様子で答えた。

「私は、世尊が三界の衆生にこの地のことを説くのを聞きました。

世尊は仰いました、東方に鉄圍山と呼ぶ幽冥の地があり、この地は日月さえそれを照らすことのできない地、すなわち地獄であると

「

寶達は、三十六王に摩竭道場での一部始終を語った。

「そのような理由で、私は悪業を為した沙門達の有様を見るために来ました。彼らに会い、どうしてこのような苦を受けることになっ

たのか、それを聞きたいと思います。」

寶達は、一端言葉を切つて、言った。

「どうか、どなたか私と共に地獄へ行つていただける方はいらつしやらないでしょうか。」

私が参りましょう。

そう言つて一人の王が寶達の前に進み出た。

王は、恒伽嚩王と名乗つた。

「ありがとうございます。貴方が私を地獄へ案内して下さいますか。」

寶達が、幾分ほつとして礼を述べると、王は寶達を礼拝して言つた。

「寶達菩薩様。地獄へ入るには大鬼王のもとへ参り、鬼王の案内で地獄へ下りねばなりません。これより、大鬼王のもとへご案内させていただきます。」

寶達は肯いた。

「分かりました、よろしくお願いいたします。」

寶達の言葉を聞くと、王は一礼して立ち上がり、先に立つて寶達を鬼王のもとへと導いて行つた。

「大鬼王様、御覧下さい！　このような地に尊き方がおいでのようです。」

鬼卒の慌てた声に、鬼王は顔を上げた。指差す方を見ると、確かに光り輝くような菩薩が、恒伽嚩王に案内されて門を入つてくるどころだった。

どうしたことかと訝しく思いながら、鬼王は座を降り、進み出てその尊き菩薩を迎えた。

「恒伽嚩王様、ご案内ご苦労様でございます。こちらはいずれの尊き方にございませうか、何故このような悪処においでになられたのでしょうか。」

鬼王が礼拝して尋ねると、菩薩は困つたような顔をして言つた。

「御手をお上げ下さい。私は寶達と申します、世尊のお力添えをいただき、この鉄圀山の中にあるという地獄を見に参りました」

寶達は、鬼王に摩竭道場での一部始終を語り、自分がここへ来た理由を話した。

「そういう理由でございます。どうかこの地、地獄について私にお教え下さい。」

鬼王は肯いて言った。

「得心が行きました。何なりとお尋ね下さい。」

「それでは」

寶達は問うた。

「この東方鉄圀山には、どれほどの数の地獄があるのでしょうか。山中を遠く見渡すような目をして、鬼王はその問いに答えた。

「数を云うならば、この鉄圀山中には無量の地獄があります。

人の犯した罪の数だけ、地獄が生まれます故に。もともと、沙門の墮ちる地獄であれば、今この一方に三十二の沙門地獄がございます。

「三十二」

「はい。それぞれ名を挙げれば、鉄車鉄馬鉄牛鉄驢地獄、鉄衣地獄、鉄鉢地獄、洋銅灌口地獄、流火地獄、鉄床地獄、耕田地獄、斫首地獄、焼脚地獄、鉄鏘地獄、飲鉄鉢地獄、飛刀地獄、火箭地獄、「月*鬼」肉地獄、身然地獄、火丸仰口地獄、諍論地獄、雨火地獄、流火地獄、糞屎地獄、鈎陰地獄、火象地獄、?聲叫喚地獄、鉄「金*疾」「金*離」地獄、崩埋地獄、然手脚地獄、銅狗鈎牙地獄、&a mp; ; # 2 1 0 8 5 ; 皮飲血地獄、解身地獄、鉄屋地獄、鉄山地獄、飛火叫喚分頭地獄の三十二でございます。」

恐ろしげな地獄の名を耳にして、寶達は打ち沈んだ顔で鬼王に尋ねた。

「その三十二の沙門地獄に墮ちた者たちは、どのような苦しみを受けているのでしょうか。」

鬼王は寶達の顔を見た。悲しげなその顔は、それでもまだ光り輝いて見えた。

「これらの地獄で沙門達の受ける罰も、その名の通りでございます。さらに詳しくお知りになりたければ、その目で御覧になられた方がよろしいでしょう。」

鬼王がそう言うと、寶達は沈んだ顔で肯いた。

「分かりました。どうぞ、私を三十二の沙門地獄へご案内下さい」

鬼王は意外に思つて寶達の顔を見直した。

その様子から、地獄の有様などとも見ることはできまいと思われただからだ。

「ご案内するのは宜しゅうございますが、地獄は悪業の者を罰するところ、無残な有様をお目にされることになると思います。そのお覚悟はありますか？」

躊躇うかと思つたが、寶達は、はい、と肯いた。

「分かりました。ならば、ご案内させていただきます。」

鬼王は寶達に深く一礼すると、寶達を地獄へと案内して行った。

仏説仏名經卷第二 大乘蓮華寶達問答報応沙門經

鬼王に伴われ、寶達はいよいよ地獄へと入って行った。鬼王は寶達を高い樓閣へと案内し、寶達はそこから最初の地獄を見下ろした。

これが地獄というものかと、寶達は息を呑んだ。

高い鉄の城壁に囲まれたそこは、燃え盛る炎に赤く照らされている。城壁には、四方に鉄の門が備えられており、その四方の門前には大勢の罪人達が集められ、号叫していた。城壁の中には炎に包まれた鉄車、炎を纏った鉄の猛牛、猛馬、猛驢が、猛り狂って罪人達を待ち構えている。

「寶達菩薩様。」

地獄の有様に目を見張る寶達に、鬼王が声をかけた。

「これが、三十二沙門地獄の一、鉄車鉄馬鉄牛鉄驢地獄にございませぬ。聳える城壁は高さ一由旬、周囲十五由旬の地獄を囲んでおります。地獄を囲む城壁の出入り口は東西南北にひとつずつ。一度この門から中に入れば、何人たりとも許しを得ずに門を出ることはできません。」

「なんといいところでしょう。」

寶達は悲しみに眉根を寄せた。

「寶達菩薩様、北門を御覧下さい。」

鬼王の言葉に、寶達は北門に目を遣った。

その時北門が開かれ、北門に集められた沙門達の泣き叫ぶ声が、辺りに大きく響いた。

北門を開けよ。

命令を耳にして、北門を守る馬頭羅刹は鉄の門扉をゆっくりと開けた。

門前には五百人の沙門が集められているが、どうせ急いで開けたところで、沙門達がなだれ込んで来るわけではない。彼らは恐れお

びえ、地獄に墮ちるその時を、一刻でも先に延ばしたいと尻込みするのだ。

「なぜわたくしが、このような苦を受けねばならぬのでしょうか」「わたくしは沙門の身にございます、どうしてこのような苦を受けようような悪事を働きましょう　お許し下さい。」

沙門達の泣き叫ぶ声が響く。

何をか況や。

馬頭羅刹である彼はそう思う。彼らは沙門の身でありながら、戒律を犯したためにこの地に送られて来たのだ。言わば沙門の身であればこそ、苦を受けるのである。

北門の門前に集められた沙門達は、怯えて泣くばかりで進もうとしない。彼らを囲む馬頭羅刹、夜叉などの地獄の獄卒達は、手にした得物を振り上げて門の中へと追い込み始めた。

「いやです、いやです。」

鉄棒で追い込もうとすると、ひとりの沙門がしゃがみ込んで動くうとしなくなった。次々と、周りの沙門達がしゃがみ込み、なんとか門の中へ押し込まれまいと地に伏す。

馬頭羅刹は黙って三鈷を手にとった。

こうした時は、門を入らねばもつと恐ろしい目に遭うのだと分からせるしかない。

彼は、初めに座り込んだ沙門に向かって三鈷を振り上げ、その背に振り下ろした。三鈷の先が沙門の腹へと貫け通る。

沙門達の間から悲鳴が上がった。

幾人かの獄卒たちが、悲鳴を上げる沙門達をあるいは燃え上がる鉄の縄で縛り上げ、あるいは焼けた鉄の首枷を嵌めて引く。しかし怯えた沙門達は進もうとせず、かえってその場に座り込んでしまう。

馬頭羅刹は、三鈷に貫かれてもがいている沙門に向かって鉄棒を振り上げる。ぐしゃりと無造作にその頭を打ち砕くと、沙門達の悲鳴が止まった。

さらにその沙門の身体をぐしゃぐしゃと微塵に砕いてみせる。沙

門達は恐怖に目を見開き、目を閉じることもできずにその有様を見ていた。

「進め。」

馬頭羅刹が、見つめる沙門達に向かって鉄棒を振り上げて見せると、彼らはふらふらと門をくぐり始めた。すすり泣く声が時折り聞こえたが、泣き叫ぶものはもう、なかった。

やがて、門前の沙門達は皆地獄へと入って行った。後には、打ち潰された沙門だけが骸をさらしている。骸には餓鬼や餓狗が取り付き、肉をかじり血を舐め始めていた。

馬頭羅刹は沙門の骸に目を遣り、命ずる。

活きよ。

命ずると、打ち潰された沙門はたちまちもとの姿に戻り、生き返った。

辺りを見回し、自分の身を見回して、がたがたと震えている沙門を門の中へと追い込んで、馬頭羅刹は鉄の門扉を閉じ、重い門を掛けた。

がしゃりという音が響き、彼は振り返った。

既に門は堅く閉じられている。とうとう彼は、地獄へ堕ちたのだ。

彼は、若い頃に仏道を志して出家し、ある時までは真面目に修行してきた。後わずかで、悟りに至るほどの沙門であったのだ。

しかし、彼の名が知れるようになると、彼には沢山の信施が施されるようになり、高位の人々から呼ばれることも多くなった。そうして彼は、沙門の分を忘れたのだ。彼は立派な車に乗り、牛馬や驢馬を所有して、沙門でありながら裕福な生活を送った。仏の戒を破った沙門は既に沙門ではない。そのことを自覚しながら、彼は人々の信施を受け続け、贅沢を続けた。

その結果がこれである

びくびくと辺りを見回した彼は、思わず悲鳴を上げた。炎に包ま

れた猛牛が引く車が彼の方へと迫って来たのだ。猛牛は地を踏み鳴らして吼え彼に向かって突進してくる。

逃げる間もなく、彼は頭を抱えてしゃがみ込んだ。ぶつかると思った瞬間、しかし彼の身体は羅刹の鉄棒によって跳ね飛ばされる。跳ね上げられた身体が焼け爛れた車の上に落ち、転げて牛の背へと落ちた。鉄牛の背中では鋭い毛で覆われ、炎を吹き上げている。うつ伏せに落ちた彼の腹から背中へと、鋭い鉄の毛が突き抜けた。

声も出せずにもだえ苦しむ彼を、鉄牛は再び跳ね上げる。衝撃と共に、彼の身体は鉄馬の背へと落ちた。鉄馬の背には、鋭い毛が上を向いて彼を待ち受けていた。再び全身に走る痛苦に、彼は呻き声を上げる。彼の呻きを聞いて、鉄馬は鋒のような尾を振った。声を上げる間もなく、彼の身体は鉄馬の尾に切り砕かれて、粉々に砕け散った。

その身が切り砕かれ、粉々に散ってゆく恐怖と苦痛を感じながら、彼はまた幾分かほつとしていた。この苦痛に耐えれば、微塵となつた身体はもう苦しみを感じることはないだろうと思つたからだ。

しかし、彼の身体が苦痛を感じなくなったと思つた瞬間、砕けた身体はたちまち元に戻り、彼は活き返っていた。

「！」
彼は茫然と元に戻つた自分の身体を見回す。

茫然と立ちすくむ彼を、しかし鉄馬が容赦なく蹴り付け、彼は再び微塵に蹴り砕かれて、たちまちに元に戻される。

死ねぬのだ。

そのことに気がつき、彼は身体の芯が凍りつくような恐怖に身を震わせた。

どれほどの苦痛にのたうち、その身が砕け散ろうと、焼け失せようと、彼は死ぬことを許されないのだ。生きていることが苦痛ではないこの地獄で、死ねないことはこの上ない恐怖である。

彼はぼんやりと顔を上げた。目の前に、炎に包まれた驢馬が、怒り狂って迫っている。

「 たすけてくれ。」

呟く彼を、鉄の驢馬が無情に踏みつける。
踏み砕かれながら彼は、己のしてきたことを後悔して涙を流した。

「 いかかでございますか、寶達菩薩様。」

鬼王の言葉に、地獄の有様をじっと見つめていた寶達は、悲しみに満ちた顔を上げた。

「 惨いこととお思いになられるでしょうが、すべては彼らの悪業故にございます。お心をお痛めなさいますな。」

鬼王が言ったが、寶達は悲しみの表情を浮かべたままだった。

「 寶達菩薩様、こちらに獄卒の馬頭羅刹を呼んでおりますが、何かお尋ねになりますか？」

見ると、馬頭の羅刹が、寶達の前に控えていた。

寶達は、羅刹に尋ねた。

「 羅刹よ、この地獄に堕ちている沙門達は、一体何をしたのでしょう。何故、このような苦しみを受けなければならないのですか。」

羅刹が答えた。

「 菩薩様に申し上げます。この沙門どもは仏の戒を受けながら、今日この苦しみを思わず、ただ一時の喜びのみに溺れて戒を忘れた者たちでございます。淨戒を犯し、不淨の財を蓄え、車に乗り、牛を使い、馬に騎り、驢馬に荷を負わせて贅沢をし、心には慈悲みの心がなく、沙門が守るべき威儀を正さず、すでに沙門とはいえぬような生活をしながら、沙門のごとく人々の信施を受けるといふ悪因のために、今この地獄に堕ち、百千萬劫に渡って苦しみ続けねばなりません。」

「 百千萬劫、その後はどうなるのです？」

「 たとえ人身を得たとしても、五体は不具となり、三宝を目にすることは叶わず、正法を聞くことができないでしょう。」

羅刹の言葉に、寶達は涙を流した。

「どうして沙門達は三界を出でて悟りにつくことができないのでしよう。なぜ、このような罰を受けねばならないほどの悪業をつくってしまったのか。」

嘆く寶達に鬼王が声をかける。

「寶達菩薩様、このような沙門達が、ここには沢山おります。どうぞ得心が行くまで地獄をお巡り下さい。」

鬼王に促され、寶達は涙を浮かべながら鉄車鉄牛鉄馬鉄驢馬地獄を後にした。

仏説仏名經卷第三 大乘蓮華寶達問答報応沙門經

「寶達菩薩様、ここが沙門地獄の二、鉄衣地獄にございます。」

鬼王に伴われ、寶達は次の地獄へと足を踏み入れた。

寶達は、鉄衣地獄というその地獄を見渡す。そこは、辺り一面が炎に覆われていた。

「この地獄は周囲一六由旬、先の地獄同様東西南北にそれぞれ門がございます。東門の方をご覧ください、辺りに響く叫び声は、先程東門から獄中に入れられた沙門どもが上げている叫び声でございます。」

言われて寶達は、東門のほうに目を遣った。

門扉に堅く門を掛け、馬頭羅刹は沙門どもの方に向き直った。幾人かの獄卒が得物を手に、彼らを地獄の中へと追い立てている。しかし、八百人の沙門どもは地獄の有様に怯えて進まず、門前にひしめき合っていた。

あちこちから悲鳴が上がる。

獄卒達が、鉄棒で小突き上げ、鉄鉤で引つ掛け寄せて、進まぬ沙門どもを炎の中へと追い込んでいるのだ。

高く悲鳴が上がった。

沙門が幾人か、炎の中へと放り込まれたのだろう。怯えた沙門が数人、馬頭羅刹の方へ向かつて駆け出して来る。

「往生際の悪いことだ。」

呟いて、馬頭羅刹は手にした三叉の鉄叉で無造作に沙門を突き刺した。

ぎゃっ、と悲鳴が上がり、三叉の切っ先が背から胸に抜ける。貫かれた傷口から炎が上がり、沙門はしばらくもがいて動かなくなつた。

駆けてきた沙門達が、慌ててもと来た方へ走り出す。続けざまに

二三人を突いて、馬頭羅刹は鉄叉を納めた。貫かれ、倒れた沙門達に狗や餓鬼が取り付いて、血肉を貪り始める。

馬頭羅刹の鉄叉を逃れた沙門達も、次々に炎の中へと投げ込まれていく。どちらにせよ、彼らに安寧の道は残されてはいないのだ。

足元に目を遣ると、倒れた沙門の身体は既に跡形もなく喰いちぎられている。

活きよ。

命じると、たちまち沙門達は生き返った。

「往け。」

座り込んだまますすり泣く沙門達を叱りつける。

沙門達が、泣きながら地獄へと向かうのを見て、馬頭羅刹は小さくため息を吐いた。

寶達は、東門を入り、次第に炎の中に追い込まれてゆく沙門達を、じっと見ていた。

泣き叫ぶ声、悲鳴、助けを呼ぶ声、呻き声　それらが、遠く、近く、響いている。

一際高い悲鳴が上がり、沙門がひとり炎の中へと投げ込まれる。切れ切れに悲鳴を上げながら逃げ惑う沙門の身体に、なにやらふわりとまとわりついた物があった。それが、真っ赤に焼けた鉄の衣だと知って、寶達は思わず両手で目を覆った。

鋭い悲鳴が上がる。

そつと手をのけると、焼けた衣にまとい付かれた沙門が、身体中を炎に包まれ、苦しみのたうっていた。

「寶達菩薩様。」

再び目を覆おうとした寶達に、鬼王が言う。

「彼らはあるような苦しみを、一昼夜の内に幾度も幾度も味わうのです。」

「一体。」

寶達は涙を浮かべて尋ねる。

「一体、彼らは何をしたというのです？」

鬼王は答えず、傍らの馬頭羅刹を見遣った。

「お答えいたします。」

馬頭羅刹は一礼し、寶達の前に出た。

「この者どもは、仏の淨戒を受け、沙門となりながら威儀を守らず、着けるべき法衣を捨て、俗人同様の衣服を身に着けておりました。

仏の禁戒に反したため、今この地獄に堕ち、このような苦しみを受けております。」

寶達は、悲しげな顔で呟いた。

「彼らはどうして、三界を離れ沙門となりながら、自らを慎まざるような悪道に堕ち、このような苦しみを受けるのか、どうして、解脱して安穩を得ることができないのか。」

馬頭羅刹が、黙って頂垂れた。

「寶達菩薩様、次の地獄へご案内いたしましょう。」

悲しみ頂垂れる寶達を鬼王が促した。

寶達は静かに肯き、もう一度鉄衣地獄に目を遣った。苦しみ叫ぶ沙門達の様を目に焼き付けて、寶達はその地を去った。

仏説仏名經卷第四 大乘蓮華寶達問答報応沙門經

寶達は、沙門地獄第三の地獄へと足を踏み入れた。

目の前に広がる地獄は、周囲を高い鉄の城壁に囲まれ、沙門達が苦しみに耐え切れず、逃げ出すのを防ぐためか、上空を鉄の網が覆っている。城壁の中は隙間なく炎が燃え盛っていた。

「鉄銖洋銅地獄にございます。」

鬼王が言った。

「縦横二十四由旬、周囲を鉄の城壁、鉄の網が覆い、炎が燃え上がり
り」

悲しげに頂垂れる寶達を見て、鬼王は言葉を切った。

「寶達菩薩様。この地獄に堕ちた沙門どもの苦しみは、こればかりではございません。南門の辺りを御覧になって下さいませ。」

寶達は、悲しげな顔を上げて、今まさに沙門達が追い込まれてきた南門の辺りに目を遣った。

門が閉じられ、あちこちから怯えた声が上がる。

一緒に追い込まれたのは、彼と同じ沙門なのである。五十人ほどが不安げな顔で立ち竦んでいる。

その眼前で、轟々と炎が燃え上がり、大きな池から溶けた鉄がどろどろと流れ出し、幾筋もの河を作っている。まさに地獄である。

閉じられた門に目を遣り、彼は舌打ちする。

彼は、これまで地獄の苦など恐れてはこなかった。沙門となったのも、名を上げ、利を得るためである。実際、戒を受け、清浄行を
持すと誓いながら、彼は四重の禁戒を犯している。

沙門の身にありながら戒を犯せば、地獄へ堕ち、苦報を受ける

そんなことは、信じてはいなかった。

しかし

今、彼の目の前に広がっているこの地は、紛れもなく地獄である。

背後で叫び声上がる。

恐ろしげな顔をした獄卒が、新しく地獄へと墮ちてきた彼らを、炎の中へと追い込もうとしていた。

「なぜわたしがこのような苦を受けねばならないのです!」

獄卒に腕をとられたひとりの沙門が、泣き叫ぶ。

分からぬわけではあるまい。

獄卒の声が響く。

彼はもう一度舌打ちする。

追われてゆくにつれて地獄の様が見えてくる。

どろどろとした熱い流れに引き入れられ、身を焼かれた沙門達が悲鳴を上げる。

彼はちらりと後ろを見る。

怯えて蹲る沙門が、獄卒の馬頭羅刹に三叉の鉄叉で貫かれ、鉄棒で頭をひしがれ、舌を鉄鉤で引つ掛けられて引きずられてゆく。

足を止めることもできず、彼はいつの間にか熱い流れの岸へと追いたてられていた。

炎を上げて流れる河の中に突き入れられて、熱さに叫ぶ声が幾つも響く。

岸边には熱さに耐えかね這い上がるうとする沙門達とそれを待ち受ける獄卒が群がっている。

這い上がるうとする沙門を鉄の箕を手にした獄卒が捉える。箕の中には赤熱した鉄砂が盛られ、鉄鉤でこじ開けた口の中に注がれる。沙門は悶絶し、注がれた鉄砂は沙門の背を焼き抜いて川面へとこぼれてゆく。

彼の腕に、獄卒の手がかかる。

沙門の目、口から、炎が上がるのが見えた。

有無を言わさぬ力で腕が引かれ、彼の足が溶けた鉄の流れに浸る。熱さに我知らず悲鳴が上がる。

苦しげにもがく沙門の口には、容赦なく熱く焼けた鉄砂が注がれ続けていた

沙門達の苦悶の声を聞きながら、寶達は静かにその顔を上げた。

「この者たちの罪状をお尋ねになりますか？」

鬼王が問う。

傍らには馬頭羅刹が控えていた。

寶達は静かに頷いた。

「それでは、お答えいたします。この者どもは沙門となりながら真理を求めず、利を求め、名を上げることばかりに執心し、苦報を畏れず四重の禁戒を犯しながら、貪欲に信施を貪っておりました。当然ながら三宝、四諦、因縁も知らず、足るを知らぬことは大海のようでございます。この罪により、今地獄へ堕ち千萬劫を経る苦を受けているのでございます。いずれ、人として生まれましても、& amp; # 3 0 2 3 0 ; となり言葉を話すことはできません。」

馬頭羅刹の言葉に、寶達は悲しげに眉根を寄せる。

「なぜ」

寶達は悲しげな顔で呟く。

「彼らは沙門であつたはずなのに 会い難い法に会い、淨戒を授かり、解脱の道を踏み出したはずの彼らが、なぜこのような苦を受けるようなことを為すのでしょうか。なぜ苦報を畏れず戒を犯す邪見の道へと入ってしまったのか」

はらりと、寶達の頬を涙が伝う。

「我らには分かりませぬが」

鬼王が言う。

「人の世とは、ことほどさように人の身を誘惑する処なのでございましょう。一度は真理の道の入り口に立ちながら、そこから逸れて行く者の如何に多いことか」

寶達は静かに涙を流し、その地を去った。

仏説仏名經卷第五 大乘蓮華寶達問答報応沙門經

寶達は鬼王に伴われ、さらに次の地獄へと足を踏み入れた。

「寶達菩薩様、これが流火地獄にございます。」

憂いに沈んだままの寶達に、鬼王が遠慮がちに声を掛ける。

「縦横二百由旬、ご覧の通り周囲を鉄の城壁、鉄の網が覆い
ふと寶達の方を見て、鬼王は言葉を止めた。」

項垂れた寶達の目が、深い悲しみを湛えている。

「寶達菩薩様。」

鬼王は言う。

「これ以上、ご覧になられぬほうがよろしいのでは御座いませんか
」
しかし、寶達は静かに首を横に振った。

「私は、知らねばならないのでしょうか。世尊は私に、世尊がお憂い
になる理由が知りたければこの地に赴き、彼らの苦しみを目にし、
彼らの苦しみの理由を聞けと仰いました。私はまだ無量の地獄を僅
かに一部覗き見たに過ぎません。まだ、私には知らねばならないこ
とが多く残っています。」

きっぱりとした寶達の言葉に、鬼王は自分の言動に恥じ入った。

「大変失礼致しました。」

恐縮する鬼王に、寶達は慌てる。

「私のほうこそ、ご案内いただいているというのに失礼を致しまし
た。どうぞ、続きをお聞かせ下さい。」

促され、鬼王は言葉を継いだ。

「御覽の通り、流火地獄は嚴重に周囲を囲まれ、内部は猛火が
流れ渦巻いております。今、西門に六百人の罪人どもが、大声で泣
き叫んでいる様をご覧になれますでしょうか。」

問われて寶達は西門に目を向ける。いずれも沙門と見える薄汚れ
た者たちが、獄卒に追われて泣き叫んでいた。

「私が一体何をしたというのです」
薄汚れた沙門どもが叫ぶ。

「恥を知れ！」

彼は縋り付いて許しを乞う沙門をそう怒鳴りつけると、手にした利刀でその頭を一閃の元に切り落とした。

物も言わずに倒れる沙門を、馬頭羅刹である彼は、苦々しげに見下ろす。日毎地獄へ堕ちてくる恥を知らぬ沙門達に、彼は些かうんざりしていた。

「ぎゃあああつ。」

向こうで苦しげな悲鳴が上がる。

渦巻く炎の流れの中で、獄卒達が薄汚い沙門どもを洗っているのだ。手足を捉えて炎の流れに浸すと、火が沙門どもの身に流れ注ぎその身体は焼け爛れて、痛みに泣き叫ぶ。

恥知らずどもには相応の苦しみであらう。

彼はそう思う。この沙門どもは、形こそそれらしき姿をしているが、不浄の者どもであるのだ。人々から口を漱ぐ楊子や沐浴の香湯を施されてもそれを使うこともなく、不浄で自堕落な生活を送り、ただ生きるために世間を乞食して回る。形ばかり沙門に似る恥知らずである。

足元を見ると、先ほど切り捨てた沙門の体に餓鬼や餓狗が取り付いて肉を齧り、鳥がその髓を啄んでいる。不浄の身も飢えたものには御馳走らしい。

馬頭羅刹は顔をしかめてこれらを追い、手にした刀の先で地を突き、命ずる。

「活きよ」

忽ち沙門は元の姿に戻り、その死肉を貪っていたものたちが残念そうに散ってゆく。

「お許し下さい」

震えながら哀願するのを無視して、彼は沙門を捉え渦巻く炎の中

に投げ入れる。汚れた身を炎に洗われ、沙門が悲鳴を上げた

「なんと惨いさまであることか」

炎の中で身を爛らせ、泣き叫びながら生死を繰り返す沙門達の様を悲しげに見つめ、寶達は呟く。

「彼らは、このような苦しみを受けるとどんな理由があるのでしょうか？」

寶達の言葉に、鬼王が傍らに立つ馬頭羅刹を見遣る。

「彼らは沙門にありながら自堕落で浄戒を犯し、沙門とは名ばかりの不浄の身で、世間を歩き回っております。そのため、この地獄へ堕ち、浄火によってその身を洗っております。一日一夜に幾度もその身を炎に浸し、千死千生、万死万生してその身を浄化しております。」

馬頭羅刹の言葉に寶達は頂垂れる。

「何故、彼らは解脱の道に入りながら再び牢獄の中に還って行くのでしょうか。何故生死を離れた境地に至りながら三悪道へと戻り来るのか。暗闇の中の浮木のような仏法に遭い、ようやく明かりが見えたというのに、どうしてまた再び暗闇の中に還って行くのでしょうか。彼らとて沙門の身であれば、浄行を行い解脱したはずの者達ではありませんか」

寶達の嘆く声が静かに響いた。

鬼王も馬頭羅刹達も目を伏せ、流火地獄を去った。

仏説仏名經卷第六 大乘蓮華寶達問答報応沙門經

「これが、鉄床地獄にございます。」

鬼王が眼下に広がる地獄を指した。

周囲はこれまで同様鉄の城壁に囲まれ、城壁の上は鉄の網で覆われている。

「鉄床地獄は縦横五十由旬、四方から炎が吹き出す地獄の中央に備えられた鉄床には、鋭い刃が据え付けられ、罪ある沙門どもを割いております。」

云われて寶達は地獄の中に目を向けた。

「これは」

地獄の中は、炎に満ちていた。

殊に、鉄床が据えられているはずの中央辺りは炎が渦巻き、白刃が炎をうつつして時折りきらめくのが見えるばかりだった。

「一体、この炎の中で、沙門達はどのような苦しみを受けているのでしょうか…」

寶達は呟く。

「あまりの炎に、寶達菩薩様のお目にはこの地獄の様はおうつりになりますまい。幸い馬頭羅刹は目が利きますゆえ、その目に映った地獄の有様を語らせましょう。」

傍らの馬頭羅刹が寶達の前に進み出る。

「貴方の目は、あの炎の内が見通せるのですか？」

寶達が問うと馬頭羅刹は、はいと肯き、眼下を指して話し始めた。

「今、炎の向こう側、東の門から、七百人余りの沙門どもが入って参ります」

門の扉が開き、大勢の沙門どもが雪崩を打って城内に押し寄せてくる。後ろから彼らを追い立てる獄卒の声が響く。

地獄の中は四方から炎が燃え盛り、彼らを待ち受けている。追い立てられる恐怖に雪崩れ込んできた沙門どもの足が止まり、苦痛の聲が上がる。

傍らでは、進もうとしない沙門の腰を、獄卒の馬頭羅刹が手にした三股の鉄叉で突いている。鉄叉の先が沙門の身体を貫いて、臍から突き出していた。

鉄床近くでは、追い立てられて来た沙門を馬頭羅刹が待ち受け、捉えて頭上高く掲げると、上向きに植えられた鋭い刃の上に落とす。腹から背へと刃が突き抜けるそのたびに、悲鳴が上がった

馬頭羅刹が目映るものをそのまま口にすると、寶達は思わずと言った様子で顔を歪めた。

「酷いこと。彼らはそのような目に遭うような、一体何をしたいのでしょうか。」

馬頭羅刹が答える。

「この地獄に墮ちる沙門どもは、仏の浄戒を受け沙門となりながら、未来無上の仏道を求めず、ただ現在の利益、名声を求め、四禁、八萬威儀を犯し、満足を知らず、炎が枯れ草をなめつくすように貪欲に信施を貪った者どもでございます。また、座る作法も知らず、仏の座す床に上り、師の座を踏みつける有様。この地獄において生死を繰り返し、一日一夜のうちにも限りない苦しみを受け、やがて地獄を出て人に生まれても諸根不具となります。」

馬頭羅刹の言葉を聞き、寶達は炎に包まれた鉄床地獄に悲しげな目を向ける。

「沙門として、解脱の門の入り口に立ちながら 悲しいことです。」

寶達の言葉を受けて、鬼王は眼下を見下ろす。無数の沙門どもが炎の中で苦しみ叫んでいる。寶達の目には、彼らがこの上も無く悲しい存在に映るのだろう。

悲しげな目で眼下を見下ろし続ける寶達をそっと促し、一行は鉄

床地獄を去った。

仏説仏名經卷第七 大乘蓮華寶達問答報応沙門經

「寶達菩薩様、御覽下さい。」

鬼王が眼下の地獄を指す。

「これが沙門地獄の第六、火象地獄で御座います。」

寶達は、息を呑む。そこには、炎に包まれた巨象が沙門達を跳ね上げ、踏み砕いていた。

暴れ迫る巨象に恐れをなし、悲鳴を上げて逃げ惑う沙門達。それを追い立てる獄卒夜叉。追い立てられた沙門達に、巨象の鼻が尾が足が迫る。

彼らが跳ね上げられ、踏みしだかれる無残な様に、寶達は思わず目を覆った。

「なんと、恐ろしい」

踏みつけられ、跳ね上げられた沙門の身体が、燃え上がる地面に叩きつけられ、焼け失せてゆく。

「無論、これで終わったわけではありません。」

鬼王の言葉に目を上げると、巨象が通り過ぎた後の焼け爛れた地面に、獄卒夜叉が立って居る。その夜叉が、手にした鉄棒で無造作に地面を打って「活きよ。」と命ずると、忽ち辺りから呻き声が上がる。

「あの沙門どもはあのように幾度でも元に還り、一日一夜に千生万死して苦しみつづけます。たとえ地獄を抜け、人に生まれ変わったとしても、不具の石女となるでしょう。」

寶達は悲しげに鬼王の言葉を聞きながら、彼らを見下ろす。眼下では繰り返される恐怖に泣き叫ぶ沙門達を、再び夜叉が追い立てて行った。

「彼らは、どのような罪を犯して、このような恐ろしい罰を受けているのでしょうか。」

寶達は、地獄の様を悲しい気持ちで見つめながら、傍らに立つ馬

頭羅刹に問う。

「お答えいたします。この沙門どもは、仏の淨戒を受け、沙門の身となりながら戒を守らず、淫行を行い、不淨の身で仏堂へ入り、佛像を穢し、恥じる心を持ちませんでした。そのため今、こうして地獄へ墮ち罰を受けております。」

寶達は、ぱつりと悲しみの涙を落とし、この地獄を去った。

仏説仏名經卷第八 大乘蓮華寶達問答報応沙門經

寶達は、さらに進んだ。眼下に、鉄壁に囲まれた地獄が広がっている。縦横五十由旬というその地獄の門前には銅狗が炎を吐き、城壁の四隅には毒蛇が口を開けていた。

「菩薩様、沙門地獄の第七、抜舌地獄に御座います。」

鬼王が言った。

寶達は静かに頷いた。

「ただ今獄卒等が、北門から五百人ばかりの罪ある沙門どもを、地獄へ追い込んでおります。」

目を転じると、北門の辺りは蜂の巣を突付いたような騒ぎである。逃げ惑う沙門達、彼らを鉄棒を振り上げて追い立てる馬頭羅刹たち。怒号と悲鳴が響く。ひとりひとりは見えないものの、皆恐ろしさに顔をゆがめているのだろう。

その様を、寶達は哀しい気持ちで見つめた

彼は怯えた顔を上げて、あたりを見回した。今彼は、恐ろしげな羅刹に追われて歩いている。彼の周りにも大勢の沙門達がいた。皆素裸で、怯えた様子で追われてゆく。行く先は地獄であると、誰もが思っているに違いなかった。

「まったく、なぜ」

彼は苛々と周りに目を走らせ、呟く。焦燥感が身を焼いていた。確かに彼は、少しばかり不和の種を蒔いたかもしれないが、このようなところへ連れてこられるとは、夢にも思っただけでなかった。

ざわり、と、辺りがざわめく。彼は目を上げた。

目の前に、地獄の城壁が迫っていた。

堅固な鉄の城壁は高く長く、どれほどの広さか知れない。とても乗り越えられはしないだろうが、城壁の上には鉄の網が掛けられ、

乗り越えようとするものを阻んでいた。

さらに近づくと、聳える門が見えた。あの門から地獄へと入れられるのかと思うと身が震えたが、それよりも恐ろしいのは、門の前にどっかりと座った巨大な銅の狗だった。身体が赤銅に光り、ざらざらとした鋭い牙の覗く口からは時折り炎が吹き出している。

恐怖に思わず足を止めようとしたとき、ギリギリと音を立てて鉄の門が開けられた。

中の様子を窺い見た沙門達が、悲鳴を上げた。門の内から炎が溢れ出し、鉄の門を叩いている。

なぜ、なぜこんなところへ来てしまったのか

馬頭羅刹たちの怒号が響き、何人かの沙門達が、悲鳴を上げながら地獄へと追い込まれて行った。

傍らでは、怯え竦んで門へと進もうとしない沙門達が、鉄棒で打ち据えられて声も無く倒れる。倒れた沙門にたちまち餓鬼や狗が喰らいつくのを、彼は恐怖に目を見開きただ茫然と見つめていた。

立ち竦む彼を、馬頭羅刹が手にした鉄棒で小突く。

追い立てられるままに、彼はふらふらと地獄の門をくぐって行った。

追われてくる沙門達を、彼は驚& a m p ; # 2 5 6 8 1 ;みにした。

獄卒夜叉に捕らわれた沙門が悲鳴を上げる。もっともこれが悲鳴の上げ納めである。あたりには沙門達の呻吟する声が満ちているが、悲鳴も絶叫も聞こえてはこない。

それもそのはずで、沙門達は舌を長大に引き伸ばされ身動きもならず、呻いているのだ。

ぐい、と夜叉である彼は、手にした鉄鉤で捕らえた沙門の舌を引きずり出す。耐え難い苦痛に呻く沙門の舌を、かまわずぐいぐいと抜けんばかりに引き出し、押し広げてゆく。あっという間に舌は地

獄中を覆わんばかりに広がった。無造作に手を離すと、沙門は地に伏した。身動きもならず、声も上げられない。ただ、呻くばかりである。

すべての沙門どもが地に伏したのを見届けて、彼は鉄鋤をとる。すでに何が起るか知っている者は、怯え、涙を流しながら呻き騒ぐ。哀願の言葉さえ、沙門どもは口にすることはできない。ただ、呻くのが精一杯なのだ。彼もまた、無言で鋤を振るう。沙門達の引き広げられた舌に鋤が入り、血が流れ、血の中から炎が起る。ずたずたになった舌が焼かれて、呻吟する声が辺りに満ちる。

やがて沙門どもの舌は鉄斧に刻まれ、刻まれた舌の山ができる。そうしてようやく死ぬことを許された彼らは、たちまちの内に生き返り、再び痛苦に呻くのだ。

哀れと思わぬこともないが、相応しき罰であろう。

誹謗、中傷、悪罵、両舌。

いずれ沙門に相応しからざる口舌の罪を犯した者どもである。弁解など聞く気にもならない。

再び生き返った沙門どもが、呻き声を上げ始める。

彼は、再び鉄鋤を取った

「静かなものでございましょう。あの者どもは、ああして言葉もなく一日一夜に無量の苦を受け、千万回も生死を繰り返します。」

地獄の様を見渡して、鬼王が言った。

その言の通り、門前ではあれほど騒がしかった者達が、今は声もなく呻吟していた。

寶達は、悲しげにその様を見つめ、問うた。

「なぜ、彼らはあるような罰を受けるのでしょうか。」

馬頭羅刹が答えた。

「この地獄の罪人達は、仏の淨戒を受けながらそれを守らず、両舌を使い、他人を悪罵誹謗し、偽りを伝えて良善を貶め、また他人を

呪詛した者どもです。千万劫を経るともこの地獄を脱する機会はなく、もしもいずれここから脱することができたとしても、常に鸚鵡などの畜生に生まれ、人声を発することができても他人の言葉を聞き理解することができません。さらに人に生まれることができても、百生、千生も唾となり、また口が常に悪臭を発することとなりましよう。」

寶達は、ぼつりと涙を落とした。

「邪見の道に入ってしまったということは、なんと悲しいことなのでしょう。迷いに溺れ、無知に惑い、解脱を得てなお再び邪な思いに帰るとは。出家したものがどうしてつくりごとを説くのでしょう。」

悲しげに呟く寶達に、鬼王が言う。

「己の利に捕らわれてしまったのでしよう。人の世のことは我等には知れませぬが、利とは人を惑わすものです。欲を切り捨てることは難しく、そのためにここへ堕ちてくる者が数多くおります。」

寶達は、一層悲しげな顔をした。

「参りましよう。」

鬼王が云うと、寶達は悲しげに頷き、この地獄を後にした。

仏説仏名經卷第九 大乘蓮華寶達問答報応沙門經

「寶達菩薩様、ここが沙門地獄第八、焼脚地獄で御座います。」

鬼王の声に、寶達は悲しい目を上げた。鬼王がやや心配げに寶達を見る。氣遣わしげな視線に気づき、寶達は少しばかり微笑んで見せた。

力ない笑みではあったが、鬼王は氣を取り直したように言葉を継いだ。

「この地獄は縦横七十由旬、ご覧のように周囲は鉄城、鉄壁、鉄網に覆われ、蟻の這い出る隙も御座いません。」

寶達は地獄に目を遣る。

嚴重に困われた地獄の内部は、炎に覆われていた。

思わず、ため息を漏らす。

鬼王が、そんな寶達の様子を悲しげな目で見る。しかし、寶達の決意を知る彼は、もう寶達の地獄巡りを止めようとはしなかった。

「寶達菩薩様、西門を御覧下さい。」

代わりに鬼王は寶達に西門を指して見せる。

「今、八千人の沙門達が、門の中に入れられたところで御座います。」

寶達はその無残な様に、悲しみに満ちた目を向けた。

「なぜわたしがこのようなところに入らねばならぬのです。」

彼方此方から似たような声が上がっている。

馬頭羅刹は、そんな訴えを齒牙にも掛けず、手にした鉄棒で近くの沙門の頭を小突いた。

どれほど訴えたところで、既に地獄の門は閉ざされており、一度閉ざされた扉は許しがなければ開くことはない。沙門どもは地獄へ墮ちたのだ。今は泣いて無実を訴える彼らも、すぐに諦めて大人し

く罪の報いを受けることになるだろう。己の罪を顧みず救いを求めることは、無駄なのだ。

「わたくしは、仏法に帰依しておりました沙門でございます お許し下さい。」

なればこそ、沙門地獄である。

馬頭羅刹は、無言で哀願する沙門を押し遣る。その足元には炎が迫っていた。

「熱い、あつい」

沙門どもの叫び声が大きくなる。

炎が足元を舐め、突き出た鉄棘が足を刺している。

小突き回していた沙門のひとり、痛苦に耐えかねて倒れ伏す。

馬頭羅刹は無言で沙門を引き起こす。その足が焼け爛れ、切り裂かれて歩けなくなるまで、止まることは許されない。

呻き泣きながら、沙門はじりじりと歩き出し、再び倒れた。身を焼く炎から逃れようと、立ち上がるうともがくが、果たせなかった

馬頭羅刹はもがき叫ぶ沙門を捨て置いて、他の沙門どもを小突き回しながら追い立てて行った。やがてどの沙門どもも倒れ伏し、焼け失せては生き返り、千死万生して苦しむこととなる。

またひとり、沙門が倒れこむ。

もがく沙門を一瞥して、馬頭羅刹は歩を進めた。

「ご覧の通りでございます。」

鬼王が言った。

「地獄に満ちる炎はあの者どもの脚を焼き、地から突き出す鉄棘は彼らの足を刺します。やがて彼らは地に倒れ、身を焼かれて悶絶し、そうして一日一夜に万端の苦報を受け、千死千生、万死万生して苦しむこととなります。」

「彼らは」

寶達は悲しみに満ちた目で、問う。

「彼らは、何をしてこのような苦しみに堕ちたのでしょうか。」

傍らの馬頭羅刹が畏まったまま答える。

「この者どもは、沙門として仏の淨戒を受けながらそれを軽んじ、不淨の足で仏地、僧地を踏み、仏像を敬わず、馬や驢馬に乗ったままその前を過ぎました。そうしたことを恥と思つ心も無かつたため、この地獄へ堕ち苦しみを受けているのです。」

「仏法に帰依する沙門でありながら、その礼のなんと失われていることか。」

寶達は悲しげに俯いた。

「そうした者が堕ちているのは、ここばかりではありません。」

鬼王が眉を顰めて言った。

「沙門の礼は失われる一方で、そうした沙門が堕ちる地獄は多いのです。」

寶達は、それを聞いて泣き悲しみ、静かにその地を去った。

仏説仏名經卷第十 大乘蓮華寶達問答報応沙門經

「ここが沙門地獄の第九、火鏘地獄で御座います。」
鬼王が云った。

「ここもまた、礼節を失った沙門の墮ちる地獄に御座います。」
「そうですね。」

鬼王の言葉に、寶達は深い憂いのため息を吐いた。
これまで世尊の元、清浄な心で生きてきた寶達にとって、仏に帰依した沙門の身でありながら、仏に対する礼を忘れた者達が少なからずあることは、ある意味罪を犯す者がある以上に寶達を悲しい気持ちにさせていた。

鬼王は深い憂いを湛えた寶達の横顔をそつと見遣り、小さなため息を吐いた。

「寶達様、ご覧下さい。」

鬼王は気を取り直すように眼下を指す。

どれほど深い悲しみに捕らわれようと、寶達は、この清い菩薩は、世尊の言に逆らって途中でこの地を去ることはしないだろう。鬼王は、そう確信していた。

縦横百五十由旬のその地獄は、周囲を鉄壁に囲まれ、猛火が燃えている。相も変わらず無残な様であったが、寶達は、その憂いを帯びた目を上げた。

「南門をご覧下さい。」

鬼王は言う。

「今南門に五千人の沙門があつて、地獄へと追い込まれるところに御座います。」

足元には、鉄の針が無数に生えている。

猛火の燃える鉄壁の内、閉ざされた門の中は、見渡す限り大小の

鋭い鉄の針が地面から突き出していた。

なぜ、こんなところに入らねばならないのか。

すでに彼の足は、鉄針に傷つけられて血を流している。

「わたしに何の罪があるのです」

彼は必死で訴えた。

獄卒が、目を向ける。恐ろしげな馬頭羅刹。その手には三股の鉄叉が握られている。

「わたしが、なにをしたというのですか。」

恐ろしさに震えながら、彼は訴える。獄卒は、彼を冷たく見据えて言った。

「お前は、沙門であつたのだろうか？ ならば、おのれがなぜここにいるのか、分からぬはずはあるまい。」

彼は恐ろしさを忘れ、当惑した顔で馬頭羅刹の恐ろしげな顔を見上げる。

「分からぬか。」

だからお前は地獄へ堕ちたのだ。

と、獄卒は吐き捨てるようにそう云った。

「お前は形ばかり沙門となり、戒を受けながらその戒の中身さえ十分に知ろうとせず、礼節を忘れ、恥じる心が無かつた。」

だからお前は地獄へ堕ちたのだ！

獄卒は再びそう言つて、鉄叉を取り、傍らで泣きながら尻込みをしている男の背を無造作に突いた。

ぎゃつと悲鳴が上がり、男の胸から鉄叉の先が覗く。

分かつたのなら、さつさと行け。

男を貫いたまま、馬頭羅刹が恐ろしい顔で彼を睨み付ける。

「わたしは」

言いかけて、彼は頂垂れた。

そして、涙を浮かべて歩き出した。

其処此処から悲鳴、怒号、哀願の聲が上がる。

鉄針が足を貫き通す痛みを感じながら、彼はぼつりと涙を落とし

た。

寶達は、静かに地獄の様を見つめていた。

鉄壁に囲まれた地獄の中は、一分の隙も無く鉄針が突き出している。その中を獄卒に追われて右往左往する沙門達の足は、血に濡れていることだろう。

「あの者たちは、昼夜の別なく、休むことなく獄卒に追われて歩き続け、生死を繰り返します。いずれ人に生まれ変わることがあっても、足は不具となるでしょう。」

鬼王の言葉に、寶達は憂いに満ちた顔を一層曇らせ、傍らの馬頭羅刹に問うた。

「彼らは、どのような悪業を作ってこの地獄へ堕ち、このような苦しみをうけるのですか。」

傍らに控える馬頭羅刹が答える。

「この地獄に堕ちた沙門どもは仏の淨戒を受けながら威儀を守らず、履物をつけたまま清殿に上がり、仏地僧地を踏みつけ、仏像靈塔の影を踏みつけにして憚らなかつた者たちでございます。そのため不儀の足を鉄針に貫き、罰しているのでございます。」

「そうですか。」

寶達は深く憂い嘆き、地獄を望み、涙を流してその地を去った。

仏説仏名經卷第十一 大乘蓮華寶達問答報応沙門經

寶達は、次の地獄へと重い足を進めた。

「沙門地獄第十、飲火鉢地獄に御座います。」

鬼王が告げる。

縦横三百由旬、鉄壁に囲まれたその地獄からは、沙門達の恐れ怯える声が響いていた。

「東門を御覧下さい。」

寶達は静かに頷き、もはや恐れることなく、しかし深い憂いを湛えて、炎に包まれた城壁に囲まれたその地獄の内を見下ろした。

東の門が開き、大勢の沙門どもが押し合いながら地獄の内へと追い込まれてくる。その数はおよそ八千と伝えられていた。

鉄の門扉を潜った途端、地獄内に満ちる熱気で沙門達の身の毛が炎を上げる。熱さと恐ろしさに泣き叫ぶ沙門どもを、馬頭羅刹は手にした三股の鉄叉で、地獄の奥へと追い立てた。

お許し下さい。

わたくしが、なんの咎で。

お助け下さい。

様々に言い立てる沙門どもを、馬頭羅刹は睨みつけ、進めと怒鳴りつけ、進まぬ者は鉄叉の先に貫いて、奥に据えられた大& amp; #37962;の前へと追い立てる。

大& amp; #37962;の傍らには、獄卒夜叉が、追立てられてくる沙門どもを待っていた。

獄卒夜叉は鉄杓を手にして、傍らの大& amp; #37962;に目を遣った。大& amp; #37962;の中には、焼け溶けた鉄がふつふつと沸き返っている。彼は己の左手に目を遣る。手には

鋭く曲がった鉄鉤が握られている。

最初の沙門が、彼の元に辿り着く。怯えた沙門は彼の前に入るなりその足元に平伏し、助けってくれと泣き叫んだ。

獄卒夜叉は無言で足元の沙門を睨みつけ、左手の鉄鉤を沙門の顔を掬うように打ち込んだ。

あああつ、と声が上がリ、沙門が身を起こす。見開かれた目と口。大きく開かれた口の中には下顎から打ち込まれた鉄鉤の先が覗いていた。

獄卒夜叉の手が大& a m p ; # 3 7 9 6 2 ; に伸びる。手にした鉄杓にたつぷりと滾る鉄を汲み、抉じ開けた沙門の口に灌ぐ。悲鳴を上げる間もなく舌咽喉が焼け、沙門は無言で手足をばたつかせ、逃れようと足掻いた。鉄杓が空になるまでたつぷりと溶鉄を灌ぎ込むと、沙門の体から煙が上がリ、体中の毛穴から炎が吹き出す。それを見届けて、獄卒夜叉は打ち込んだ鉄鉤を外した。

目を上げると、無数の沙門達が& a m p ; # 3 7 9 6 2 ; の前に引き据えられていた。恐れ怯えて逃げだそうとする沙門達を、馬頭羅刹が鉄叉で脅しつけている。

泣き叫ぶ沙門どもを次々に断罪しながら、馬頭羅刹と獄卒夜叉は、目を見合わせてそつとため息を吐いた

「あの者たちの口中に灌がれているのは、煮え滾る溶鉄で御座います。」

引き据えられる沙門達を悲しく見つめる寶達に、鬼王が言った。「彼らは、日々こうした罰を受け、千万回も生死を繰り返して苦しみます。もしも人身を得ても、聾、盲、& a m p ; # 3 0 2 1 2 ;、& a m p ; # 3 0 2 1 0 ; など不具となり、仏名を聞くことができず、千仏が世に出るのを見ることはできないでしょう。」

「あの沙門達は、このような罰を受ける何をしたのでしょうか。寶達が、馬頭羅刹に尋ねた。」

その顔は、憂いに沈んでいる。

「この沙門どもは、仏の淨戒を受けながらそれを守る心がありませんでした。人々に施された物を決められた時に食べることをせず、禁じられた夜間に食事をし、僧の食べ物を盗み取りました。他から施された物のみで生きるという戒律があるにも関わらず、それでは飽き足らずに、自分で作った物を口にして憚ることがありませんでした。そうした貪欲を戒めるためにこのような罰を受けているのでございます。」

「仏の示した淨戒が、これほどに失われているとは。」

寶達は、悲しげな顔に涙を浮かべ、項垂れた。

「仏の教えが広まり、沙門が増えるほどに、戒律の威儀も忘れられてゆくのかもしれません。仏の淨戒を犯して恥じる心のない沙門どもが、まだまだここには大勢居ります。」

鬼王は、項垂れる寶達に、暗い面持ちでそう言った。

寶達は、悲しみに泣いてこの地を去った。

仏説仏名經卷第十二 大乘蓮華寶達問答報応沙門經

寶達は、また次の地獄へと進んだ。

「ここは飛刀地獄で御座います。」

鬼王が言った。

縦横十五由旬、周囲を鉄壁に囲まれ、鉄網が覆うその地獄は、猛烈な風火の中、両刃の利刀が虚空を飛び交っていた。

「これは」

寶達はあまりの光景に、思わず絶句する。

「飛刀地獄と呼ばれるこの地獄は、常に猛烈な風火が吹き荒れております。」

鬼王が言った。

「そのため、地獄中にある鉄山が吹き寄せられて互いに擦れ合い、風火に磨かれて鋭い刀となって飛び交い、沙門達の頭上に降り注ぎます。」

寶達は、地獄を望み見た。刀は怯え竦む沙門達の頭上を自在に飛び交い、虚空で打ち合わせり鳴る様は、雷のようだった。

寶達は、更に飛刀の下の沙門達を望み見る。沙門達はいずれも身を屈め、頭上の刀から逃れようと泣き叫びながら右往左往している。しかし、彼らの頭上には、無数の刀が飛び交い、逃れる術も無く降り注いでいた。

降り注ぐ刃は、あるいは沙門の頭を刺し貫いて足元へと抜け、あるいはその背から入って胸へと抜ける。刃が沙門を刺し貫くたびに、貫かれた体から炎と血飛沫が上がった。

無残な様を目の当たりにして、寶達は思わず目を覆い、深いため息を吐いた。

「沙門達は、この地獄中を逃げ惑い、例外なく降り注ぐ刃に刺し貫かれて、一日一夜に万死万生して苦しみを受けます。もし人身を得ることができても身体に悪瘡を生じて苦しむことになりましょう。」

鬼王は、寶達に悲しげな目を向けて、そう言った。

寶達の悲しみに触れるうち、いつしか鬼王の心にも、深い憂いの
気持ちは広がっていた。

「彼らが苦しむ理由を、教えてください。」

「はい。あの者どもは戒を受けながら、仏の淨戒を守らなかった沙
門どもで御座います。」

非情なはずの馬頭羅刹さえ、その表情に僅かな憂いを湛えている。
「あの沙門どもは、慈しみの心を持たず、飲酒食肉し、罪の報いな
どないと豪語した者どもです。愚かなりとはいえ、食肉の罪は許さ
れざる罪で御座います。よって、このような罰を受けております。」

馬頭羅刹の言葉を聞いて、寶達は深い悲しみに涙を流し、この地
を去った。

仏説仏名經卷第十三 大乘蓮華寶達問答報応沙門經

寶達は、悲しみを抱え次の地獄へと進んだ。

「ここは、火箭地獄に御座います。」

鬼王が、眼下を見下ろし、そう言った。

縦横九十由旬、鉄壁に周囲を囲まれ、猛火の燃え盛る地獄は、一見すると先の飛刀地獄に似ていたが、その地面は炎に包まれ、一面に鉄棘が突き出している。また、虚空には刃ではなく、無数の火矢が飛び交っている。

「この火箭地獄は、飛刀地獄同様、四方から吹く熱風により鉄山が吹き寄せられ、虚空に矢を生みます。この矢は互いに擦れあい、炎を発して沙門達に降りかかるのです。沙門達は降り注ぐ火矢に身を貫かれ、地上の鉄棘に足を貫かれながら逃げ惑い、その痛みに泣き叫ぶ様はとても言葉にすることはできません。彼らは、一日一夜に千死千生、万死万生して無量の苦を受けるので御座います。」

寶達は、憂いに満ちた目を上げた。

憂いに沈む寶達を見る鬼王、地獄の様を見慣れているはずの馬頭羅刹さえ、その顔は憂いを帯びて沈んでいる。

「彼らは、どのような罪を犯して、このような報いを受けているのでしょうか。」

馬頭羅刹が答えて言う。

「この者たちは仏の淨戒を受け、沙門の身となりながら、仏の威儀を失し、俗人のように弓矢を手に入れました。經典に、昔戒律を守らず、俗人のごとく弓矢を使って殺生を行う比丘が、万世に渡ってその悪報を受けたとあることから、こうした沙門が三悪道に墮ちることは知れたことでございます。今ここで苦しみを受ける沙門達もまた、同じこと。万世に渡ってその悪報を受け、苦しみ続けることでございます。」

馬頭羅刹の言葉に涙し、寶達は、無残に泣き叫ぶ沙門達を見下ろ

す。寶達にも、世尊の憂いの理由が、分かったように思えた。しかし、この寶達の悲しみとて、世尊のその深い憂いの幾許かを垣間見たに過ぎないのだろう。

寶達は憂いの涙を流し、この地を去った。

仏説仏名經卷第十四 大乘蓮華寶達問答報応沙門經

寶達はさらに次の地獄へと歩を進めた。

憂いに沈みながらも、その足取りに迷いは無い

「寶達菩薩様、ここは「月*鬼」肉地獄と申します。」

鬼王が眼下の地獄を指して言った。

寶達は、眼下の地獄を見下ろす。そこには、沙門達の姿は無く、代わりにこれまで目にしたことのない生き物が蠢いていた。

「寶達様、あそこに蠢いているものが、この地獄に堕ちた沙門達の成れの果てでございます。」

鬼王が、蠢くものを指してそう云った。

「あれが」

寶達はそう言ったきり絶句する。

蠢いているものは、どことは無く人に似てはいるが、一丈ほどの大きさがあり、手足は無く、目も口もついてはいないようだった。

ぼんやりと、彼は目を覚ました。

辺りを見回し、彼は思わず悲鳴を上げそうになった。彼の周りには、人に似た芋虫のようなものが、無数に転がっていた。

飛び起きようとして、彼は自分の手足が動かないことに気がつく。見ると、己の手足がなくなっている。慌てて己の身体を見回すと、彼は周りで蠢く気味の悪いものと、自分が同じ姿をしていることに気がついた。

今度こそ、彼は、喉も裂けんばかりの悲鳴をあげた、はずであった。その、悲鳴がほとばしるはずの口が、無い。目だけは、ぼんやりとあいているような気がするが、それも定かではない。

一体、どうしてしまったのか。

彼は、人であったはずである。沙門だったのだ。

確かに破戒もし、沙門としては褒められたものではなかったかもしれないが、少なくとも、このような得体の知れないものではなかったはずだ。

彼は、必死で考える。自分がどうしてしまったのかを。しかし、彼の思考は長くは続かなかった。

目の端に、彼は、なにやら恐ろしいものを捉える。周囲の人形芋虫達がざわめく。次の瞬間、彼の身体は、馬頭羅刹が手にした鉄鉤に跳ね上げられる。彼は、瞬時にして悟る。自分が、地獄へと墮ちたことを

「一体、何の罪で」

彼は、開かぬ口で訴える。獄卒は答えず（聞こえぬものか）、芋虫のような彼の身体を獄中へと投げ飛ばした。

どさり、と彼は身動きもならぬまま、獄地へと叩きつけられる。

そこには、逆さに生えた鋭い鉄棘が、無様な芋虫を待ち構えていた。鉄棘に身を刺され、彼は苦痛にのた打ち回る。のたうつ度に棘はその身を刺し、体中から吹き出る血は炎となって彼の身を焼く。

「なぜ、なぜ」

苦しみ泣きながら身をくねらせる彼は、突然鋭い痛みを感じ、その身を跳ね上げる。彼の肉に、餓鬼が喰らいつき、傍らで狗が吹き出る血を飲んでいいる。痛みと恐ろしさに、逃げ出すことさえ、彼にはできない。ただその身をくねらせ、のたうつことしか彼にはできなかった。

鉄の鳥が舞い降り、剥き出しになった彼の筋をついばんでいる。やがてすっかり食い尽くされても、再びもとの芋虫に戻され、苦しみが続くのだろう。

絶望にとらわれ、苦痛に身を苛まれながら、彼は届かぬ悲鳴を上げ続けた。

縦横四十由旬、鉄壁に囲まれ、鉄網に覆われたその地獄で、その

奇妙な生き物は、無言で蠢いていた。

その動きは、緩慢であるが、けして静かなわけではなく、鉄棘に刺され、炎に焼かれて、彼らが非常な苦痛を感じているのが判る。また、餓鬼にその身を喰らわれ、鉄嘴に突付きまわされる苦痛から、何とか逃れようと、身をよじる様も哀れであった。

「彼らは、どのような罪を犯したのですか。」

寶達は、傍らの馬頭羅刹に問うた。

「お答えいたします。」

馬頭羅刹が言う。

「この者どもは仏の禁戒を受け、沙門となりながら無上の菩提を求めず、ただ現世の名利ばかりを求めた者です。また酒を貪り飲み、そのために法を破り戒を破り、三十六の則を失いました。よって今、この地獄に堕ちて苦しみを受けて居ります。この後人身を得ても、貧窮に喘ぎ、またその身は愚かにして、仏の教えを知ることはい無いです。」

寶達は悲しみに満ちた目で、蠢く彼らを見遣った。

声にはならぬ救いを求める声が、聞こえてくるような気がした。

寶達は悲しみに泣いて、この地を去った。

仏説仏名經卷第十五 大乘蓮華寶達問答報応沙門經

寶達は、さらに次の地獄へと進む。

眼下には、猛火の燃え盛る地獄が見えた。聳える鉄壁がその地獄を囲んでいる。炎に霞む地獄の中からは、沙門達の苦痛の叫びが聞こえていた。

「寶達菩薩様、ここは沙門地獄の十四、身燃地獄で御座います。縦横五十由旬、四方から猛火が燃えて罪人どもを焼いて居ります。叫び声を上げておりますのは、今、東門から地獄に入れられようとしている沙門達に御座います。」

そう言つて、鬼王は東門を指した。

寶達は促されるまま、沙門達が犇めき合う東門へと目を向けた。

ぎいと鉄の扉が鳴つて、東の門が開けられた。扉を叩いていた炎が、門の外へと溢れ出し、沙門達の悲鳴が上がる。一度でもその炎に触れた者、または一歩でも地獄の門を潜った者は、たちまちその身から炎が上がり、毛穴のひとつひとつから火が吹き出している。

「わたくしは仏の戒を受けた沙門の身、なぜこのようなところへ入れられねばならないのです。」

炎の吹き出る我が身を叩きながら、訴え叫ぶ沙門を、馬頭羅刹は冷く睨み付けた。

「なぜわたくしの身を、焼くのです?」

睨まれた沙門は、怯えながらも必死に訴える。

「誰が焼くわけでもあるまい。」

馬頭羅刹は冷たく言い放つ。

「お前を焼くその火は、外から放たれたものではない。己の身の内から燃え出たものであろう。」

苦痛を訴える沙門の顔に、僅かに戸惑いが浮かぶ。

「その炎は、身の内の怒り、怨み憎しみが変じたもの。仏の教えを受けながら、愚かにも怒り罵り合い、恨み憎んだその心が炎と変じたのだ。」

「死して後まで」

沙門の顔が怒りに歪む。

愚かだ。

馬頭羅刹はいつそ哀れみを込めて、沙門を睨む。

この怒りゆえに、おのれはこの地獄へと堕ちたのだ。

ごう、と一際大きく炎が上がり、沙門は憤怒と苦痛に顔を歪ませて崩れ落ちた。六根から火が流れ出る。沙門が怨嗟の声を上げる。

馬頭羅刹は悲しげな顔で沙門を一瞥し、去った。

炎に包まれた地獄から、怨嗟の音が響く。

寶達は思わず耳を覆った。

鬼王が傍らの馬頭羅刹を促す。

「菩薩様、この沙門どもはあるいは師に従わず、あるいは弟子を慈しまず、互いに敬う心を待たず、怒り、罵り合い、目を怒らせて競い争い、遂にはその心に怨憎を生じたためにこの地獄へ堕ちた者どもでございます。地獄を脱し、人の世に生まれ出たとしても、出会うたびに互いに殺し合う事でございます。」

なんと、愚かしいことが。

寶達が呟く。

「愚かしいことにございます。この者どもは、一日一夜に無量の苦を受け、死ぬこともならず苦しみます。」

鬼王がそう言って、哀れむように身燃地獄を見下ろした。

寶達もまた、悲しい思いで沙門達を見下ろし、涙を落としてその地を去った。

仏説仏名經卷第十六 大乘蓮華寶達問答報応沙門經

眼下に、地獄が広がっている。

「寶達菩薩様、沙門地獄第十五、火丸仰口地獄にございます。」

鬼王が言った。

地獄を囲む鉄の城、それを覆う鉄の網。すでに寶達にも、見慣れた光景になりつつある。

「縦横八十由旬、鳴り響くのは、虚空を舞う鉄丸が打ち合う音で御座います。」

見れば、無数の鉄丸が飛び交っている。沙門達は皆空を見上げて逃げ惑っていた。

「鉄丸を虚空に吹き上げるのは、鉄壁の四隅から吹く猛風。舞い飛ぶ鉄丸は、やがて沙門どもの上に降りかかり、その口から入って足元へとその身を貫き落ちます。」

御覽下さいと、鬼王は地獄を指した。

「ぐうぐうと、立つてもいられないような風が吹き荒れている。猛風は炎を呼び、辺りは炎に包まれて息さえ出来ない。立ち込める炎を透かし、彼は空を見上げる。虚空には鉄丸が飛び交い、それらが打ち合わさる恐ろしい音が、高く低く響いていた。」

彼は不安げな目で、鉄丸の飛び交う様子を窺う。風が止まれば、鉄丸はたちまち空を切って彼らの上に降りかかり、あっという間に彼らの口から咽喉、胃から腸を貫いて足元へと転がり出る。

時折り響く悲鳴は、鉄丸に身体を貫かれ、体中の毛穴が火を吹いて倒れ伏す、不運な沙門の叫び声である。

それは人事ではなく、彼らはいつでも鉄丸の恐怖に曝され、怯え逃げ惑っていなければならない。

続けざまに、近くで悲鳴が響く。

風が弱まったのか、幾つかの鉄丸が逃げ惑う沙門達を次々と貫いたのだ。

彼は、再び怯えた目を空に向ける。身を隠すところは、どこにも無い

何時まで　こんなことが続くのか。

疲れきった身体を引きずるようにして逃げ惑いながら、彼は静かに涙を落とした

鉄丸の打ち合わさる轟音の間に、幾つもの悲鳴が響いていた。

寶達は、傍らの馬頭羅刹に、悲しげな目を向ける。

「教えてください。彼らはどのような罪で、このような苦を受けているのですか。」

馬頭羅刹が答える。

「はい、この沙門どもは仏の淨戒を受けながら罪を畏れる心を持ちませんでした。食物を分かち合うことをせず、僧の食べ物盗み食らい、恥じることが無かったために今この地獄に墮ち、苦しみを受けております。」

「彼らはひと時も休まることなく怯え惑い、一日一夜に無量の苦を受けます。地獄を脱して、もし人に生まれ変わることができたとしても、& amp; #30212 ; & amp; #30210 ; となつて話すことができないでしょう。」

悲しいことです、と鬼王は呟いた。

「本当に、悲しいことです。」

寶達は、悲しみ嘆き、この地を去った。

仏説仏名經卷第十七 大乘蓮華寶達問答報応沙門經

「寶達様、沙門地獄第十六、斫手地獄でございます。」

鬼王の言葉に、寶達はその地獄を見下ろした。

縦横三十六由旬のその地獄には、縦横五十歩ばかりの大きな鉄の台が据えられていた。

「南門の方を御覧下さい。只今、新たな沙門どもが五千人ばかり地獄へ入れられるところで御座います。」

寶達は、南に目を向ける。

沙門達の泣き叫ぶ声と共に、鉄門の開く音が低く響いた

真つ赤に熱された大鉄台の前で、彼は青ざめ震えていた。大勢の沙門達が、彼と同じように蹲り、震えながら目の前の大鉄台を見つめている。

彼らは地獄の門から追い込まれ、馬頭羅刹の鉄叉に威されて、この鉄台の前へと引き据えられていた。彼らの周りは、鉄叉を持った馬頭羅刹たちが取り囲み、逃げ出すものが無いか、鋭い目を光らせている。

彼はそわそわと辺りを見回した。

逃げる隙は、無い。

ああ、あああつ。

大鉄台からは、間断なく悲鳴が上がっている。あまりに惨い様に、彼は目を覆い耳を塞いだ。

焼けた鉄台の上には、数人の沙門達が獄卒の鉄叉の先で押さえつけられ、両手を伸ばして伏させられている。鉄台に触れる胸や腹からは煙が上がり、皮肉の焼ける臭いが漂っていた。

さらに、獄卒達の手にした鉄斧が、伸べられた彼らの手を、細かく切り刻んでゆく。

ああ、ああ

指の一本一本、一節一節が、一打ちごとに切り離され、其の度に沙門達の口から、悲鳴や呻き声が漏れる。

「どうか、ひと思いに、ひと思いに」

弄りまわされる様な苦痛に耐えかね、哀願する声が聞こえる。泣き叫び、許しを請う声が響く。

どれほど、請い願っても獄卒達が手を止めることは無い。

ひい、ひい

絶え入るような悲鳴と共に、手首から先を細切れの肉片に変えられ、胸腹を焼け爛らせた沙門達が、鉄台から追い落とされる。

血の噴出す手を上げ、魂が抜けたように座り込む彼らを横目に、代わって次の沙門達が泣きながら鉄台の上に追い上げられる。こうしたことが、あと数度、繰り返されれば、自分もまた、あの焼けた鉄台の上に押さえつけられねばならない。

うああ、あああつ

新たな悲鳴が塞いだ耳に響く。

やがて来る苦痛の恐ろしさに、彼は頭を抱え、震えながら涙を流した。

無残な様だった。

寶達は、悲しみのため息を吐いた。

「惨い様ではありませんが、彼らは皆罪を犯した者たちで御座います。そのためあの沙門どもは、昼夜を問わずこのような惨刑を受け、生きようにも生きられず、死のうにも死ねずに苦しむのです。」

鬼王が、悲しげにそう云った。

「彼らには、どんな罪があるのでしょうか。」

寶達が問う。

馬頭羅刹が答えた。

「この沙門どもは、仏の浄戒を受けながら、それを守ることをしてしま

せんでした。清浄な楊枝で口を漱ぐことをせず、手には垢が溜まり、不浄の手で經典、仏像に触れました。また、沙門として清浄であるべき手で男根、女陰を捉える行為を致しました。そのためこの地獄へ堕ち、不浄の手を切り刻まれる罰を受けて居ります。千万劫を経てもこの地獄から抜け出すことはできず、後に人として生まれ変わることがあっても、不具の身となるでしょう。」

寶達は悲しみ、静かに涙を落としてこの地を去った。

仏説仏名經卷第十八 大乘蓮華寶達問答報応沙門經

寶達はまた、次の地獄へと進んだ。

鉄壁に囲まれた地獄には、火が燃えている。

「寶達菩薩様、ここは雨火地獄と申します。」

鬼王が言った。

「まずは、地獄を囲む鉄城の四隅を御覧下さい。」

寶達の目に、城の四隅に乗る異形の獣が映る。

「あれは。」

「銅狗に御座います。」

鬼王が言う。

「銅狗はその口から火雨を降らせる雲を吐き、四頭の銅狗が吐く雲は、地獄中を悉く覆っております。」

寶達は、銅狗を見る。その牙は天に向かって突き出し、眼口には炎が燃えている。

炎の燃える口を開け、銅狗が吼える。

その口から熱気を帯びた雲が、もくもくと流れ出す。黒雲が、地獄中を覆い、火の雨を矢のように降らせる。

それは、いつそ美しいような光景であった。

空から、火の雨が降り注ぐ。遠くに、銅狗の吼え声が聞こえた。

その沙門は、荒い息を吐きながら、身を打つ火の雨を振り払う手を止めた。たちまち、彼の背や肩を降り落ちる炎が覆う。

熱さに呻きながら、彼はこの火が身を焼き尽くしてくれることを願った。間断なく降り注ぐ雨に追われ、休み無く逃げ惑い、とうに体力は限界を迎えている。逃げる当ても無い。

加えて、彼らの踏む地面には、無数の鉄の刃が上向きに突き立ち、逃げ惑う沙門達の足を、ひと足ごとに刺し貫いていた。

刃に貫かれた足を、持ち上げる力もなく、彼はその場に蹲り、大きく息を吐いた。

身を包む炎が大きくなる。辺りには、逃げ惑う沙門達の悲鳴が響き渡っていた。遠く、銅狗の吼える声を聞きながら、彼はゆっくりと地面に崩れた。

「寶達様。」

一瞬、降り注ぐ火の雨に見惚れていた寶達は、鬼王の声で我に返った。

地獄からは、銅狗の吼え声と共に、沙門達の上げる凄惨な悲鳴が響いている。

「寶達様、彼らは昼夜問わず、間断なく降り注ぐ火の雨に打たれて逃げ惑います。降りかかる火の雨は沙門達の身に触れると燃え上がり、一日に幾度となく生死を繰り返す、無量の罰を受けます。」

寶達は地獄を見た。

先程までの美しさは失せ、泣き叫び、逃げ惑い、倒れ伏してはまた起き上がって苦しむ、沙門達の悲しい様が、ありありと寶達目の目に映り、悲しみが胸に迫った。

「彼らは、どのような罪を犯したのです？」

馬頭羅刹が答える。

「この沙門達は仏の教えを受けながら、その威儀を理解せず、外道に落ちました。彼らは袈裟を持ちながらこれを着けず、裸で村々に入り、また、仏地僧地にも同様に裸で足を踏み入れました。諸天も彼らの所業にあきれ果て、狂僧が人の村に入ったと揶揄しております。今地獄に堕ちている沙門どもは、地獄を抜け出しても畜生となつて、千万劫を経ることごさいましよう。」

寶達は、悲しい気持ちで彼らを見下ろした。火の雨が、彼らの上に降り注いでいる。涙が、落ちた。

寶達は、静かに涙を拭い、その地を去った。

仏説仏名經卷第十九 大乘蓮華寶達問答報応沙門經

悪臭が、辺りに立ち込めている。

寶達は、思わず袖で顔を覆った。

「菩薩様のような清浄な方には、御身を汚すようでは申し訳御座いませんが」

鬼王が眼下に見下ろす地獄を指して言った。

「ここは、沸屎地獄と申します。縦横に流れる河は、糞泥を集めたものでございます。」

その不浄さに、寶達は顔を顰める。

縦横六十由旬、鉄城、鉄網に囲まれたその地獄の中は、どろどろとした汚泥に覆われ、その汚泥の中を糞泥の河が縦横に貫いていた。

臭気に耐え、寶達は顔を上げる。

眼下には惨い光景が広がっていた。

北門に、大勢の沙門達が集められていた。

当の沙門達にはあずかり知らぬことであるが、その数は六百人。

彼らは城門から漏れ出す臭気に顔を顰め、不安げに身を寄せている。

ゆつくりと、地獄の北門が開かれると、流れ出す臭気に、沙門達は手で顔を覆った。獄卒達の怒号が響く。

今、ひとりの沙門が門を潜った。

地獄の中へと足を踏み入れると、立ち込める臭気はますます強くなり、目や咽喉が焼けるように痛んだ。足元が、べたついている。

それでも、追われるまま、足を止めることもできず、彼は不安げに歩を進める。そして、やがてこの悪臭の元となっているものが、彼の目に見えた。

どろどろと流れ下る河が、彼らの行く手を遮っている。流れてい

るものは、思わず目を覆いたくなるような糞泥だった。糞泥の河は、その汚い川面からちろちろと炎を吹き上げながら流れてゆく。ごぼりごぼりと泡が上がるのは、その糞泥が沸き返っているのだと気がつき、彼は恐ろしさに青ざめた。

なにしろ、その河の中には、沢山の沙門達が首まで糞泥に浸けられて、溺れもがいているのだ。もがく沙門達は、水面から少しでも上上がるうと伸び上がり、時折りずぶりと沈んでは、再び頭を出して飲み込んだ糞泥を吐き出している。

「ああ……」

彼は恐ろしさに呻いた。

川岸から、次々と叫び声上がる。

どぶり、どぶりと言がして、沙門達が次々に糞泥の中に突き落とされる。

沢山の悲鳴が響き、あっと思う間もなく、彼は馬頭羅刹の手に掴み上げられる。

「なぜわたくしが」

叫ぶ彼を、馬頭羅刹の目が睨む。

「おのれらは、不浄のものを食すのが好きだったではないか。」
思う存分喰らえ、と、馬頭羅刹は沙門を沸き返る糞泥の河へ放り込んだ。

沙門は悲鳴を上げて糞泥の河へ落ち、ずぶずぶとぬめる糞泥の中にゆっくりと沈んで行った

寶達は、糞泥の中で浮き沈みする沙門達の姿を見るに忍びず、強くその目を閉じた。

その姿は、清浄であるべき沙門にあつて、あまりに惨く哀れであった。

「寶達様、穢れたことゆえ、お話しするのも憚られますが、彼らはああして沸き返る尿泥の河の中で糞泥に溺れ、口鼻から流れ込む糞

泥に五臓を焼かれて苦しむのです。」

「沙門達は どのような罪をおかしたのです?」

馬頭羅刹は答える。

「この地で苦しむ沙門達は、酒肉を好み、五辛を食した者どもでございませう。仏の浄戒を受けた身でありながら、それを守らなかつたため、この地獄に堕ちたのでございませう。」

寶達は、苦しみがく沙門達に、深い憂いの目を向け、悲しみ泣いてこの地を去った。

仏説仏名經卷第二十 大乘蓮華寶達問答報応沙門經

寶達は悲しい瞳で、地獄を見下ろした。沙門達の泣き叫ぶ声が、辺りに満ちている。

「寶達様、ここは、解身地獄でございます。縦横三十由旬、周囲は鉄城、鉄網に覆われ、罪人達の這い出る隙はございません。どうぞ、東門を御覧下さい。」

寶達は目を凝らす。東門に、幾人とも知れない沙門達が、集められているのが見えた

門が、閉じる

彼は後ろを振り返った。

ぴたりと閉じた鉄扉には、すでに堅く門が掛けられている。

地獄の炎に炙られ、沙門達が泣き叫ぶ。

「進め。」

そう彼らに命じて、獄卒夜叉である彼は大斧を取る。

沙門達の目には、すでに自分達が引かれてゆく先が見えている。彼らの向かう先には、堅固な枷が設えられた鉄台が据えられ、鉄の鋸が添えられて、沙門達が引かれてくるのを待っていた。

「私達が、何をしたというのです」

怯えた沙門達が、彼に訴える。

訴える沙門達の頭を、彼は容赦なく手にした大斧で切り落とす。

分からぬはずは、ないのだ

「お許し下さい」

大斧を振るう彼を見て、沙門達が慈悲を乞う。

彼は、哀願する沙門達を睨み付ける。無慈悲であったためにこの地獄へと堕ちてきながら、彼らは慈悲を乞う。それは、身勝手というものである。

「進め。」

彼は、再び沙門達に命じる。

多くの者達が、渋々足を進める。

どうしても進もうとしない沙門達を鉄縄で縛り上げ、数珠繫ぎに繋いで引き、獄卒夜叉は沙門達を負いたてながら歩き出した

鉄枷の前に引き据えられて、彼は震えていた。

彼は生前、沙門でありながら慈悲の心を持つていなかった。戒を受けてはいたが、肉食を改めることは生涯なかったし、己の手で畜類を殺め、解体して食べることも、珍しいことではなかった。

その、報いなのだ。今、彼は彼が殺めてきた畜生たちと同じ恐怖を味わっている。

彼は、一人の沙門が切り刻まれるのを、目の当たりにしたところである。枷に押さえつけられ、身動きひとつできぬようにされて、恐ろしさ、痛み、苦しさに泣き叫び、呻き吼え、哀願を繰り返しながら、その沙門は切り刻まれた。

次は、彼の番である

切り刻まれた沙門の身体が、台上から下ろされる。とたんに様々な畜類が群がり、その肉に齧り付いた。それらは、その沙門が生前殺し食ったものたちなのだろう。

近くにはすでに、覚えのある畜生どもが、彼の肉に齧り付こうと待ち構えている。

「次」

大鋸を手にした獄卒夜叉の音が響く。彼は竦みあがり、涙を流して許しを請うた。

「馬鹿め。」

獄卒が冷たく言って、彼を掴み上げる。

血に濡れた台上に仰向けに押さえつけられ、両手足、首、胴に鉄枷が掛けられる。

身動きのできない彼の目の前に、冷たく光る大鋸が突き付けられた。最前の沙門が、手足の先から節々を寸々に切り離されていった様が、脳裏に浮かぶ。

逃れられぬと知りながら、手足をもがかせ、泣き叫びながら慈悲を乞う彼を、獄卒夜叉が冷たく見下ろしていた

寶達は眉根を寄せ、解身地獄の凄惨な様を見つめていた。その表情は、悲しげというよりむしろ、苦しげである。

「寶達様。これが、解身地獄でございます」

鬼王が、悲しげにそう言った。

寶達は静かに肯き、顔をあげる。涙がひと筋、その頬を伝っていた。

「彼らの苦痛の声は、天までも響くと申します。この地獄に堕ちた沙門達は、このような苦患を間断なく受ける無量の罰を受け、一日一夜に千死千生万死万生して苦しまねばなりません。千万劫を経るともこの地獄を出ることはできず、もしこの地獄を脱しても畜生の身に堕ち、殺した畜類の恨みのために、百億千生も食べられるための家畜となることでしょう。」

寶達は、悲しみの涙を落とす。

「彼らは、沙門の身でありながら、あれらの生き物を殺し食らったのですね」

はい、と馬頭羅刹が答えた。

「あの罪人どもは、仏の禁戒を受けながら、無上の妙法を求めず、無慈悲に殺生を繰り返し、それらをその手で切り刻んだために、このような敵罰を受けております。畜生の生を経て人の身を得ても、百生千生も諸根不具となり、聾、盲、& amp; # 3 0 2 1 2 ;、& amp; # 3 0 2 1 0 ;となつて、手足の自由がきかず、身には多くの瘡ができて常に血膿を流して苦しみます。それが、沢山の命を奪った報いでございます。」

馬頭羅刹の言葉に、寶達は項垂れる。

業の報いとはいえ、それはあまりに惨い行末であった。
寶達は彼らの身を思って涙し、俯いたままそつとその地を去った。

仏説仏名經卷第二十一 大乘蓮華寶達問答報応沙門經

寶達は、次の地獄へと進んだ。地獄を見下ろす樓閣で、鬼王が眼下を指す。

「寶達様、これが？声叫喚地獄でございます。大勢の罪人達が、この中に入り、耐え難い苦を受けております。」

眉根を寄せ、苦悩の表情を浮かべて、寶達はその地獄を見る。地獄に、炎が燃えるのが見える。沢山の沙門達が、西門に集められていた

門の内から、地に響くような呻き声が洩れ聞こえてくる。西門に集められた沙門達は、皆不安げにその門を見つめていた。

門が、開く。

とたんに、地が震えるような呻き声が辺りに満ち、馬頭羅刹達が一斉に、門前に群れ集まった沙門達を追い立てた。怒声を上げ、手に鉄棒を取り、馬頭羅刹たちは手近の沙門の頭を突く。

なにが起こったのか判らないまま、沙門達は追われるまま、門に向かって走り出す

「ごう、という音と共に、灼けるような熱さを感じ、彼は自分がすでに地獄の中にいることに気づいた。

仏の戒を受けた自分が、なぜ

ともかく自分が、どのようなところにいるのか、確かめようと顔を上げかけた時、彼は背中をしたたかに打たれて仰け反った。

「なにを」

言いかけて彼は、自分の後ろに恐ろしい顔をした獄卒夜叉が、彼を睨み下ろしているのを見た。その手は、鉄棒を振り上げ、今にも振り下ろそうとしている。

なぜ、わたしが打たれねばならないのか

訴える間も、考える暇もないまま、彼は獄卒の鉄棒を避けて走り出す。鉄棒が空を切る。

逃げ惑う彼の背後で、幾つもの鉄棒が振り下ろされ、あるものは空を切り、あるものは背や肩をかすめ、あるものは背や尻に打ちつけられて、彼に悲鳴を上げさせた。息が上がり、咽喉が鳴る。打たれているのは彼ばかりではないようで、其処此处から掠れた悲鳴が上がっている。

目が眩み、足をふらつかせながら逃げ惑う彼らを競い打ちながら、獄卒夜叉たちが笑う。もがき逃げ惑う彼らの姿が、獄卒どもには面白いのだろう。

ぼたりぼたりと足元に血が滴る。確かめることもできないが、肩から背、尻まで、身体の後ろ側が焼けるように痛い。

足がもつれ、転びかけた時、彼の目に東の門が映った。大きな扁額の掛けられたその門は、鉄の門扉を大きく開けていた。

もしや　もしやこの苦しみから逃れられるかもしれない。あの門は彼のためにこそ、開けられているのかもしれない

力を振り絞り、彼は門へ向かった。

ぜいぜいと自分の息の音だけが聞こえる。咽喉が擦り切れるように痛かった。

ようやく、門が目の前に迫る。もう、すぐに手が届くというところで、しかしその鉄扉は、音を立てて閉じ始めた。

「　ああ……」

手が届かぬまま、彼の絶望の呻きと共に、扉はぴたりと閉じられ、彼は門に縋りつく。

門前の馬頭羅刹が、門に縋って喘いでいる彼の頭を、手にした鉄棒で強く突いた。

呻き声を上げ、彼はもと来た方へ、ふらりと足を踏み出す。獄卒夜叉達が、再び彼を打ちなぶろうと待ち構えていた

沙門達の逃げ惑うのに合わせて、四方の門が開き閉じするのを、
寶達は見た。僅かな希望に縋って、獄中を行き来する沙門達の姿を、
寶達は悲しげに見つめた。

「彼らは、どうしてこのような罰を受けるのでしょうか。」

「はい、寶達様。この沙門どもは、仏戒を受けながら慈しみの心を
持たなかったのです。生前慈悲なく畜生を棒で打ったために、今地
獄に堕ち、このような苦を受けているのでございます。」

馬頭羅刹が、そう答えた。

「寶達様」

鬼王が云う。

「彼らは、地獄中を休むことなく追い回され、打ちなぶられて、昼
夜なくこのように苦を受けます。東の門へ迎えば東の門は閉じ、西
の門へ向かえば西の門が閉じる。東西南北の門は皆同じことで、け
して出ることはできません。」

じっと、寶達は地獄を見つめる。その目には、涙が光っている。

やがてそつと顔を上げ、寶達は静かに地獄を後にした。

仏説仏名經卷第二十二 大乘蓮華寶達問答報応沙門經(前書き)

15Rでしようか。

仏説仏名經卷第二十二 大乘蓮華寶達問答報応沙門經

高い城壁が聳えている。

縦横三十由旬。四面を覆うその鉄壁の高さは、これまで見たどの地獄のものよりも高く、冥い地獄に影を落としていた。

「寶達様、ここは鈎陰地獄と申します。」

鬼王が言った。

「ここに堕ちた沙門達の罪状をお聞きいただければ、納得いただけます。納得いただけますが、獄中は他の目を憚る有様にございますので、高い城壁を廻らせております。あるいは菩薩様のお目にかかるようなものではないかもしれませんが」

「いいえ」

寶達は首を振る。世尊の命を受けて地獄を巡る寶達に、見るべきでないものなどありはしない。

「どのようなところであっても構いません。ご案内下さい。」

寶達はきっぱりとそう言った。

鬼王が静かに頷いた。

「寶達様、それでは御覧下さい。」

四方にめぐらされた高い城壁に、幽冥の空が四角く切り取られている。日月もこれを照らさぬという地獄の中でも、一層に暗いその一角で、彼はその身を小さく縮めて震えていた。

彼の目の前には、ひとりの沙門が、獄卒夜叉に押さえつけられている。夜叉はひとりが両腕、ひとりが左足、ひとりは左手に罪人の右足を掴み、右手には焼けて暗がりにも赤く輝く鉄鈎を下げていた。

捕えられた沙門が、泣き叫びながらもがいている。沙門は、これから自分がどうなるか知っているのだらう。必死に首や腰を振り動かし、手足をもがいて獄卒の手から逃れようとしている。

その動きを封じるように、獄卒夜叉が沙門の足を大きく引き広げる。哀願の聲が響いた瞬間、右手の鉄鉤が振るわれた。焼けた鉄鉤が沙門の陰部をがっちりと捉えているのを見て、彼は固く目を閉じる。背中を冷たい汗が伝っていた。

鋭い悲鳴で目を開けると、沙門は両手足を押し込まれたまま鉄鉤で吊りあげられていた。背を反らし、腰を持ち上げた様な格好で、沙門は硬直している。陰部が抉り取られそうな痛みと恐怖で身動きができないのだ。沙門はしばらくの間釣り下げられる様にして、泣き叫んでいた。

不意に泣声が止まり、うめき声上がる。見る見るうちに鉄鉤が赤熱し、炎が噴き上がった。耐え切れず、沙門が暴れ出す。

ぶつり

そう音がして、沙門の陰部が抉り取られ、支えを失った体が地面に落ちる。炎が下腹から順に燃え上がり、身を包む。苦痛に耐えかねもかく手足は、まだ獄卒夜叉に捕らえられている。

やがて、沙門の全身が燃え上がり、捉えられた手足がもぐくのをやめる。獄卒夜叉が、放り投げるように沙門から手を離れた。

彼は一層に身を縮める。

彼の周りには、沢山の沙門達が、彼と同じように身を縮めている。順繰りに自分の番が来るのだ。その時を、少しでも後にしようと、彼らは身を縮めている。

獄卒夜叉がじろりと辺りを見回す。

叫び出したいほどの恐怖に耐えながら、彼はじつと身を潜めていた

それは、懐かしい女の姿だった

かつて、沙門であったころ、ひっそりと情を交わした女である。もう、幾年前のことか思い出せなかったが、女は変わらず美しかった。

恐ろしい獄卒夜叉の手から逃げ出して、彷徨っていた男は、ほっ

として彼女のもとへ走りよる。女はにっこりと笑って、男を抱き締めた。

とたんに、男の口から悲鳴が上がる。女の身が金剛石に変わり、男の体をぎりぎり締め付け始めたのだ。女の体から炎が上がる。逃れようと暴れる男の唇に、女が吸い付く。がり、と、女の歯が男の唇を喰いちぎった

男と女が絡み合う。

思わず眉を顰める寶達に、鬼王が言う。

「さぞお目障りなことでございます。やがて男は、その業により女に食い尽くされる事となります。ここに至ってもこの罪人達は、なお過ちを悔いることがないのです。」

寶達は俯いて頭を振る。苦しげな表情が浮かんでいた。

「お察しのことと思いますが、この者達は愛欲の業によりこの地獄に堕ちた者達です。鉄鉤の苦しみから逃れようとしたところで、地獄から逃れることはできず、愛欲の業によって現れた女によって喰い尽くされ、生き返っては苦しむこととなります。一日一夜に無量の苦を受け、無量百千万劫を経るまで、この地獄を抜け出すことはできません。もし、ここを出ることができても他の業の報いを受け、畜生の中でも特に不浄の虫と生まれます。さらに二百千世を経て人に生まれても、五百世の間は胎中で死に、また五百世の間は分別の無い人間となり、貧窮し孤独で短い命を受けるでしょう。ある時は妻を娶っても他人に奪われ、ある時は自らが他人の妻を愛するなど、跡継ぎを得るのに障害がなくなることがありません。」

「愛欲の 罪。」

はい、と、傍らの馬頭羅刹が肯いた。

「この沙門達は仏の淨戒を受けながら、それを守ることができませんでした。愛欲に溺れ、放縱に淫行を繰り返したため、今このような罰を受けております。」

地獄には沙門達の悲しい悲鳴が響いている。
寶達は、悲しみ嘆いて涙をこぼし、この地を去った。

仏説仏名經卷第二十三 大乘蓮華寶達問答報応沙門經

鬼王が地獄を指す。

寶達は、次の地獄へと進んでいた。

「寶達菩薩様、ここは諍論地獄でございます。」

寶達は地獄を見下ろした。鉄壁で囲まれ、鉄網に覆われたその地獄は、縦横八十由旬ほどで、鉄の鳥がその空を舞っていた。

「まずは、西門を御覧下さい。」

西門には六千人の沙門が集められている。鬼王に促されるまま、寶達は西門に目を向けた

門が開けられ、沙門達がおずおずと入ってくる。

とたんに、高空を舞っていた鉄鳥が群れを成して舞い降り、沙門達を啄みにかかる。それを見て、馬頭羅刹である彼は、小さく舌打ちをした。

沙門どもの足が止まる。

怯えた沙門達は、立ち止まり、泣き叫んで馬頭羅刹たちに縋り、進もうとしない。

素直に進んでくれれば良いものを

彼は心の内でそう思った。縋られようと、泣かれようと、彼の役目はこの沙門どもを、地獄の中に追いやることだ。それならばせめて、大人しく入ってくれればいいと思う。

彼は鉄叉を取った。取り縋る沙門の胸を、力任せに突く。鉄叉の先が沙門の背から突き出した。鉄鳥の群れが、一斉に空へ飛び上がる。

辺りの沙門どもを威しつけると、彼らは諦めたように進み始めた。鉄叉に胸を貫かれた沙門も、いつの間にやら立ち上がり、歩き出している。

馬頭羅刹はそつと空を仰ぐ。

沙門どもを狙うのか、鉄網に遮られた空の向こうに、鉄鳥が高く舞っていた

ひいつ、ひいつ

彼の口から荒い息とともに、断続的に悲鳴が漏れる。その口からは鉄鉤に引つ掛けられた舌が、長く引き出されていた。

痛みと恐怖に目を見開き、彼は引き出された自分の舌を見つめている。

「この舌で、何をした？」

馬頭羅刹が弄るように言った。

わたしが、何をしたというのか

問い返したかったが、一杯に引き出された舌は動かない。唸る彼の目の前に、馬頭羅刹は鋭く光る鉄斧を掲げて見せた。

あがあっ

切り裂かれる痛み、彼は吼えた。ぶつり、ぶつりと音を立てて、引き伸ばされた舌が寸断されてゆく。

なぜ、なぜ

痛みに急ぎ立てられるように、彼は考える。沙門であった自分が、こんな目に遭うのは、やはり自分のしてきたことが間違이었다のか

沙門であった彼は、仏法を広めることに尽力してきた。平易な法を説き、王族に取り入り、自分の足元を固めてきたのだ。立場が整ってこそ、衆生に法を説くことができる。そのためにはどんな手を使っても、それは方便であると、わが身に言い聞かせてきた。しかし、それはやはり間違이었다のだろうか

あああ、あああ

舌を細々に切り裂かれ、血が流れ出る口は、それでも鉄鉤に舌を引き出されていたときよりは、言葉らしいものを紡いだ。

彼は必死に馬頭羅刹に問いかけようとする。

わたしは、間違っていたのかと

儘にならぬ言葉で問いかける彼を、馬頭羅刹は冷たく見下ろす。

「まだ何か、言うことがあるか」

不意に、彼の頭が仰向けられる。

背後に回った馬頭羅刹の手に、大きな柄杓が握られているのが見えた。柄杓からは、もうもうと湯気が上がっている。

うああああつ……

悲鳴はたちまち微かな呻き声になって消えた。

どろどろに溶けた金属が彼の口に流し込まれ、咽喉を焼き塞ぐ。たつぷりと灌がれた液体は、行き場を失って彼の身を焼き溶かし、やがてその背から流れ出た。

息も絶え絶えで、彼は放り出される。その口からはすでに僅かな吐息が洩れるのみで、次の罪人を捕らえようと去ってゆく獄卒に、問いかけることもできない。

苦しい息の下で、彼は自問自答を繰り返していた。なぜと。

「なぜ」

寶達は問うた。

「なぜ、彼らは地獄へ堕ちたのですか。」

鬼王が悲しげな目を向ける。

馬頭羅刹がやや躊躇いながら答えた。

「この沙門達は、仏の禁戒を破りました。我々はこの者たちのことを特に、『大乗法師また冥夜のごとし』と申しております。各々『我は仏義を深く解し、仏法を得た』などと申して人に説いて歩いておりますが、多くは人を集めるための方便、または国王の信施供養を受けるためのもので、中身はなく、まさに徒に衆を引き、惑わす者どもでございます。困ったことに、この者どもは、自分のことを山海のように偉大なものと思ひ込んでおります。しかし実際は枯木の様なもので、皮は立派でも中身は腐り爛れており、使い物にはな

りません。外側が立派でも、中身のない法を説いているのです。このため、この沙門どもは地獄へ堕ちたのでございます。」

仏の道が歪められている。寶達は頂垂れた。

「彼らは地獄を出て人となることができても、聾、盲、& amp; ; # 3 0 2 1 2 ; 、 & amp; p ; ; # 3 0 2 1 0 ; ; となつて、正法を聞くことができないでしょう。」

鬼王が言う。

「生まれ変わった後にさえも、彼らは正しい法にはめぐり合えないのですね。」

寶達の目から涙がこぼれる。

寶達は悲しみ泣いて、この地を去った。

仏説仏名經卷第二十四 大乘蓮華寶達問答報応沙門經

炎の中に、沙門達が蠢いていた。

寶達は、その地獄を見下ろしている。

「寶達菩薩様、耕田地獄でございます。」

鬼王が言った。

その地獄は縦横二十由旬、鉄壁が囲み、猛火が燃え上がっている。炎が上から下へ下から上へと燃え盛る様は、恐ろしさとともに、美しささえ覚えるほどだった。

「地面には鉄刀が生え、刃が上に向けてその先からは炎が燃え、沙門どもを切り焼いております。」

うろつろつと惑い歩く沙門達を、寶達は痛ましい気持ちで見下ろした。

「寶達様、東門を御覧下さい。六千人の罪人が、今地獄に入るところでございます。」

東門に目を遣ると、大勢の沙門達が炎に包まれていた。目や口からも火が吹き出している。沙門達は怯え、なかなか地獄の中に入ろうとしない様子だった。

しばらくもみ合い、業を煮やした馬頭羅刹が鉄叉を振り上げる。

沙門が背から胸へと貫かれ倒れる。倒れた沙門に鉄餓鬼や狗が群がった。沙門達が泣き叫ぶ。幾人かが、獄卒の鉄鉤でその身を引つ掛けられて、引きずられて行った。

寶達は目を閉じ、顔を背ける。幾度見ても、地獄の光景は慣れるものではなかった

広い畑が広がっている。

「それ、耕せ。」

鉄の牛が鋤を引くその畑で、馬頭羅刹は鉄の鍬を指してそう言っ

た。

恐る恐る、沙門達が鍬を取る。

ここにいる沙門達は、皆心得のあるものばかりで、すぐに慣れた手つきで地面を耕し始めた。

馬頭羅刹は冷たい目で、その様を見ている。

不意に、ごう、という音がした。

ああ、と沙門どもが声を上げる。

炎の流れが渦を巻き、沙門どもを焼いている。先程まで、静かに揺れていた畑の穀物や、伸びた草が皆一斉に炎を吹き上げて燃えていた。

「耕せ。」

鍬を投げ出して逃げようとする沙門を捕らえ、馬頭羅刹は冷たく言う。

お許し下さい、私が何をしたというのでしょうか。

捕らえられた沙門が泣き叫ぶ。

「何を言う。おまえ達は、沙門となり他からの施しを受けながら、それに満足することなく、己の手で食物をつくり、修行する間も惜しんで畑を耕していたではないか。」

沙門は肩を落とし、諦めたように鍬を手にした。

炎の上がる耕地の其処此処に、沙門達の苦悶する姿が影のように散っている。馬頭羅刹は、冷たい瞳で彼らを眺め渡し、小さな溜息を落とした。

「彼らは一日一夜に万死万生し、御覧のような大苦悩を受けます。」

鬼王が言った。

「苦しみに心は定まらず、千万劫を経てはじめて人として生まれることができですが、聾、盲、& amp; #30212;、& amp; #30210;となり、人に憎まれ、横暴な官吏に捕らわれ、身に

は悪瘡ができ、山野を彷徨うことになるでしょう。」

鬼王の言葉に、寶達は悲しげに地獄を見下ろす。

「彼らは、なぜそのような苦しみを受けねばならないのでしょうか。」

悲しげに問う寶達に、傍らの馬頭羅刹が答える。

「この沙門どもは、仏の禁戒を受けながら、三悪八難を慎まず、田を耕し種を植える破戒をしました。本来托鉢によつて得るべき食物を、自らの手で作り、自らの手で収穫して、自ら食べ、草木を殺す。そのような外道や梅陀羅のような行いをして、恥じる心がなかったために、この地獄に落ちたのでございます。」

寶達は悲しげに呟いた。

「なんと、難しいことなのでしょう。道を、誤らぬということは。彼らは大海を渡つたというのにその深淵に没し、その目を開いたというのに光明を見失い、一度は六道を離れたというのに再びその中へ帰り、生死を離れていながら再び欲望の炎に焼かれている。」

寶達の頬を涙が伝う。

「どうして人は、あと一步のところまで道を誤るのでしょうか。いつそ彼らが沙門ではなかったなら。」

悲しみに泣く寶達に、鬼王が悲しげな目を向けた。おそらくこれまで、そのようなことを思ったことはなかったであろう寶達の、悲しい呟きを鬼王は静かに聞いていた。

そうして彼らはそつと、この地を去つた。

仏説仏名經卷第二十五 大乘蓮華寶達問答報応沙門經

「寶達様、ここは火米地獄と申します。」

鬼王の言葉に寶達は地獄を見下ろす。眼下の地獄には、炎の川が縦横に流れていた。

燃え盛る炎の川のほとりに大勢の沙門達が集まり、流れの中に自らの手を伸べている。炎に炙られた手はたちまち焼け爛れ、あちこちで叫び声が上がった。寶達は思わず目を覆う。

しかし、沙門達は一度は炎の川から離れるものの、再び川のほとりへと戻ってくる。幾度も幾度も炎に炙られ、焼け爛れる手の痛みに泣き叫ぶ様子は、あまりに無残だった。

「なぜ 彼らは、何をしているのです？」

馬頭羅刹が答える。

「その名の通り、この地獄に堕ちた沙門どもは、炎の中の米を取ろうとして手を伸ばしているのです。無論、炎に妨げられ、米を手にすることはできません。もしわずかに手に入れたとしても、口にすれば米は炎に変じてしまいます。そのために、彼らは御覧のように痩せ細り、空腹に耐えかねて炎の川に手を差し入れているのでございます。」

見れば、沙門達は皆みる影もなく痩せ衰えている。その哀れな様子を悲しみ、寶達は再び馬頭羅刹に問う。

「彼らは一体何の罪で、このような罰を受けなければならないのでしょうか。」

馬頭羅刹は答える。

「寶達様。この沙門どもは不浄の手で僧の浄食に触れた者どもでございます。そのためにこの地獄に堕ち、空腹に苛まれ、不浄の手を炎に焼かれて苦しんでおります。」

それを聞いて、寶達はやせ衰えた沙門達に深い悲しみの目を向けた。やがて、その悲しい繰り返しから目を離すと、寶達は深い憂い

を残しその地を去った。

仏説仏名經卷第二十六 大乘蓮華寶達問答報応沙門經

寶達たちは、次の地獄へと進んだ。

その地獄は、猛風に包まれていた。縦横三十四由旬、鉄壁に囲まれ、網が覆うその地獄は猛風に揺れ動き、揺れ動くたびに炎が揺らめき立っている。

虚空には鋒のような鉄棘が乱れ飛び、雷鳴のように鳴り響いては下り落ち、罪人達を刺し貫いていた。

「鉄火屋地獄、またの名を鉄屋地獄と申します。」

鬼王が指すほうを見ると、地獄の中央近くに周囲約四十歩ほどの大きな鉄の台が据えられ、大勢の沙門達はその台上でそれぞれに報いを受けている。鉄の台には火の覆いが掛けられ、罪人たちに纏わりついてその身を焼いていた。

「御覧下さい。」

鬼王が西門を指す。

「無量無辺の罪人どもが、今、西門で叫んでおります。」

地獄の門前で、その沙門は竦んでいた。

地獄を囲む鉄壁は地面を揺らして振るえ動き、虚空には何か恐ろしいものが飛び交い鳴り響いている。

たとえどんな罪人であろうと、このようなところに投げ込まれるほどの罪などありはしないだろうと思われた。それほどに、そこは禍々しかった。

門が、開く

彼はその場に蹲る。とても自分の足で、地獄に進み入ることはできなかつた。

怒号、悲鳴　なぜ、わたしを地獄に墮とすのですか　絶叫する声が聞こえる。彼は、恐ろしさに震えながら、じっと蹲ったまま

だった。

がしり、と、冷たく堅いものが、彼の身体を挟みつける。顔を上げると、見上げるような馬頭羅刹が、大きな鉄鉗で彼を挟み上げていた。

悲鳴が迸る。身を振り、暴れるが、鉄鉗は強い力で彼の身を挟みつけていて、びくとも動かなかった。

「いやだ、いやだ」

叫ぶ彼の気持ちとは裏腹に、地獄の門が近づく。

見下ろすと、別の沙門が鉄鉗に頭を引っ掛けられて、同じく地獄へと引きずられてゆくところだった

次々に、沙門達が火の覆いの中に投げ入れられていく。寶達は、その様を悲しく見た。

「鉄台の上には、大毒蛇の鱗が敷き詰められ、沙門どもの身体に皆刺さります。また、覆いの中には鉄鳥がいて、彼らの心臓を啄み、腸を引きずり出すのです。」

沙門達の悲鳴が響く。許しを請い、助けを求める声が、寶達の耳にも届いた。

「とても、耐えられる苦痛ではありませんまい。彼らにはああして一日一夜に無量の苦を受け、死にたくとも死ねません。千万劫を経て地獄を脱することができても、畜生となって鋤を引き、重荷を背負って罪を償い、百生千生に渡って休息は許されません。」

鬼王の言葉に、寶達は馬頭羅刹を見る。なぜ、と問う前に、馬頭羅刹が口を開いた。

「寶達様、哀れとお思いでしょうが、この沙門どもは仏の淨戒を受けながら、これを守らなかつた者たちでございます。決められた衣を着けずに裸同然で眠り、またこれを見て性欲を覚え、比丘の淨行を汚し、比丘尼を汚したために今この地獄に落ちたのでございます。」

「

悲しげな瞳を向ける寶達に、鬼王が肯く。

「彼らはこの後人となっても、五逆に堕ちましよう。家は貧寒賤にして、衣は破れ、身を覆えない有様。自ら家宅を無くして、彷徨うような者になります。」

これを聞き、寶達の中から涙がこぼれた。

「どうして彼らは、出家しながら俗所に縛られるのでしょうか。なぜ、解脱の門を得たというのに、欲に迫られてこれを翻すのか。」
振り絞るように、そう呟いて、寶達は去った。鬼王はその様をじっと見つめ、その後を追った。

仏説仏名經卷第二十七 大乘蓮華寶達問答報応沙門經

地獄を見下ろし、寶達は思わず耳を塞いだ。

「業風の音にございます。」

鬼王が寶達の耳元に口を寄せて言った。

崩埋地獄、と鬼王が告げたその地獄は、縦横四十九由旬、周圍を囲む鉄城の四隅には、金剛の山が聳え、ごうごうと凄まじい音を響かせて、豪風が吹き荒れている。

しかし、聞こえるのは風の音ばかりではない。業風に吹かれた金剛の山ががらがらと崩れる音、山中からごうごうと炎の吹き出す音、空中を乱れ飛ぶ鉄棘が打ち合わさる音、そして、地獄の中央にどっかりと身を据えた四頭の大きな鉄狗が、逃げ惑う沙門達に吠え掛かる声。他の地獄では陰々と響いていた罪人達の泣き叫ぶ声が、聞こえないほどにそれらの音が鳴り響いていた。

音の洪水を分けるようにして、寶達は地獄を見遣る。そこには、逃げ惑う沙門達の姿があった

馬頭羅刹に鉄棒で頭を小突かれて、その沙門は地獄の中へと押し込まれた。

彼は知る由もなかったが、彼が放り込まれた西門には三千人の罪を犯した沙門達が集められ、彼とともに地獄へと押し込まれていた。獄卒たちに追われる彼らには、後を振り返る余裕はなかったが、背後から門の閉じる音が、鳴り響く轟音に混じって微かに聞こえた。空に、業風が渦巻いている。

比喩ではない、砕けた金剛の欠片が隙間なく空を覆い、渦を見せているのだ。空には鉄棘、利刀が飛び交って、山から吹き上がる炎に熱せられ、金剛の欠片とともに彼らの上に容赦なく降り注ぐ。

身を切り裂く苦痛と恐怖に耐えかね、彼は泣き叫ぶ。

「なぜ、このような」

馬頭羅刹が彼を小突く。

「心当たりがないと言うか。」

思わず彼は、身を竦める。彼には罰を受けるだけの心当たりがあった。それだけに、恐ろしい

凄まじい咆哮が聞こえた。

沢山の沙門達が、我先に逃げ出してくる。

彼は、彼らの後ろを透かしてみる。大きな鉄の狗が、炎を吐きながら、逃げる沙門達を追っていた。

彼は恐怖に震えて走り出す。獄卒の怒号も耳には入らなかった。

あの鉄の狗は、罪ある沙門などひと呑みにしてしまうことだろう。

いや、ひと呑みならばまだしも、喰いちぎられる苦痛にはとても耐えられはしない。

大勢の、無数の沙門達が四方へと走り散っていくのを、寶達は見ている。不思議なことに、獄卒の馬頭羅刹等も、彼らを止めようとはしない。

沙門達が、四方の山陰に走りこんだと思った瞬間、轟音が轟いた。寶達は、目を覆う。金剛の山が、罪人達に向かって崩れ落ちていた。

「寶達様」

耳を塞ぎ目を覆う寶達の耳元で、鬼王は氣遣わしげに呼びかけた。轟く音の中で、それでも鬼王の声が聞こえたのか、寶達は顔を上げる。

「寶達様、これが崩埋地獄でございます。御覧下さい、罪人どもは金剛の山に押しつぶされ、微塵に砕けて消え失せてしまいます。しかし」

崩落が納まった地獄の中には、獄卒夜叉達だけが動いていた。業風も今は止んで、地獄は静寂に包まれている。

「活！」

夜叉の声が響いた。

同時に、手にした鉄棒で地を突く。

「これは」

寶達は目を見張る。

金剛の山は、見る間に元に帰り、その下敷きになって潰れた罪人たちも、たちまち生き返り立ち上がる。いつの間にか、再び業風が空を覆い、辺りは轟音に包まれていた

「彼らは、一日一夜に無量の罰を受け、幾度でも生き返ります。この苦しみ、痛みは例えようもありません。死にたくとも死ぬことを許されないのです。」

鬼王が、地獄を見下ろして言った。

寶達は、悲しみに頂垂れる。

「彼らは、なぜ、このような地獄に堕ち来ることになったのです。」

馬頭羅刹が答える。

「はい、寶達様。彼らは、苦行の心を持たず、福田を求めたためにこの地獄へ堕ちました。豪族に寄り添い、官勢を頼みとし、賢人を侮り、貧賤を侮蔑する。あるいは他人の財宝を無理やり奪い、あるいは他人の家屋敷、資産を詐取するなど、沙門にあるまじき罪を犯し、心に恥じなかったために、今この苦を受けているのでございます。今後、百生千生もこの地獄を出ることはないでしょう。また、後にもしこの地獄を逃れることができたとしても、地下の賤しきものと生まれ、仏の正法を聞くことができません。」

自業自得にございます。

鬼王が呟くのを、寶達は悲しみに満ちた心で聞いた。

寶達は涙を流しながら、地獄を見下ろし、この地を去った。

仏説仏名經卷第二十八 大乘蓮華寶達問答報応沙門經

「剥皮飲血地獄でございます。」

鬼王が告げる。

「縦横七十由旬、その名の通り、罪人どもの生皮を引き剥ぐ地獄にございます。」

寶達は恐ろしげに地獄を見下ろす。

周囲を鉄城に囲まれ、鉄網に覆われたその地獄は、四門の上から沸き立った鉄が流れ出し、地獄中に満ちている。また、鋭い矢が宙を飛び交い、罪人の身に突き立つては炎を上げていた。

「寶達様、南門を御覧下さい。今、五千人の罪人が、追い入れられるところでございます。」

寶達は、南門に目を向ける。南門では、悲しい悲鳴が響いていた

「わたしが何をしたというのです」

泣き叫ぶ沙門を見て、馬頭羅刹は馬の頭を苦々しく顰めた。

白々しい

この罪人どもは、沙門でありながら獣を殺して、皮を剥いだのだ。泣いている沙門が、馬を殺してその皮を剥ぎ取ったことを、彼は知っている。同じ馬の頭を持った者を目の前にして、何をしたかと問う沙門を、彼は恐ろしい顔で睨み付けた。

沙門が、ひつと言つて口をつぐみ、地に伏した。少しは自分のしたことを思い出したのかもしれない。

「立て。」

沙門は動かない。

馬頭羅刹は、震えている沙門の顔に無造作に鉄鉤を打ち込んだ。

突然の仕打ちに、沙門が悲鳴を上げる。かまわず地獄へと引きず

り込むと、罪の深い証拠にはたちまち沙門に炎が纏わりつき、その身を炙り焼いた。

沙門が泣き叫ぶ。

焼け爛れた皮肉が離れ、血が噴出すと、幾千種もの虫が沙門にたかり始め、その血を啜り、皮肉の間に潜り込んで皮肉を分けて行く。

「助けて、たすけて」

あまりの苦痛に耐えかねて、沙門が叫ぶ。獄卒夜叉が、泣き叫ぶ沙門を冷酷に見下ろし、その身に手を掛けると、皮を剥ぎ取った。

沙門の絶叫が、辺りに響き渡った

「御覧の通りにございます。」

鬼王は、静かに言った。

寶達の耳に、沙門達の悲鳴が響いている。

「炎に焼かれ、離れた皮肉の隙間から、幾千の虫が潜り込み、その血を啜ります。獄卒夜叉はその皮を引き剥がし、骨肉は分かれてその痛みは例えようもないといえます。一日一夜に無量の苦を受け、千死千生、万死万生して、千万劫を経るともこの地獄を出る期はないでしょう。」

苦痛に叫ぶ声に満ちる地獄を、寶達は痛ましげに見下ろす。

「彼らは、何をしたのです？」

馬頭羅刹が答える。

「この罪人どもは、仏の浄戒を受け沙門となりながら、それを守りませんでした。心に慈悲はなく、仏性のある生き物を殺害し、その手で皮を剥ぎ取ったのです。その罪のために、今この地獄へ墮ちております。後にもしこの地獄を出ることがあっても、畜生の身となり、百千億生他に害され殺されるでしょう。どのような生き物であっても、恨む気持ちに変わりは無く、相対することは終わりがありません。人と生まれることがあっても、諸根不具となりましょう。」

罪人達の悲鳴が響く。

寶達は悲しげに頂垂れ、涙を流してこの地を去った。

仏説仏名經卷第二十九 大乘蓮華寶達問答報応沙門經

「飛火叫喚分頭地獄でございます。」
鬼王が告げた。

寶達は、その地獄を見下ろしている。縦横六十由旬、鉄城、鉄網で囲まれた地獄の中では、沙門たちが右往左往して逃げ惑っていた。
「御覧下さい、寶達様。」

鬼王が東の門を指す。

そこには、沙門達がひしめいていた。

「三万六千人の沙門が、新たに地獄へ入るようでございます。」
寶達は、痛ましげに息を呑む。

「これほど沢山の沙門達が」
鬼王が静かに肯く。

悲しげに見つめる寶達の前で、東門の堅固な鉄の門扉が、音を立
てて開いていった

その沙門は恐ろしさに震えていた。

後ろから、馬頭羅刹達が「進め」と叫ぶ恐ろしい声が響いてくる。
前を見れば、大きく開かれた蔽めしい門の中に炎が燃え盛るのが見え、喚き叫び、助けを求める叫喚の音が聞こえていた。

なぜ、わたしが

彼は、こぼれそうになる涙を堪えながら呟く。沙門として、それなりに戒を守って生きてきたつもりだった。それなのに、なぜ

いつの間にか、恐ろしげな顔をした馬頭羅刹が、彼のすぐ後ろに迫っていた。

「往け。」

雷のような声が、彼に浴びせられる。

恐ろしさに、思わずひいっと咽喉が鳴った。足が震え、前に進む

ことができない。

馬頭羅刹が手にした鉄棒を振り上げる。

「慈悲を」

沙門は、震える足を前に進めようともがいた。

「往けつ。」

声と共に、馬頭羅刹の鉄棒が振り下ろされる。背をしたたかに打たれ、息が詰まって、彼は声もなく地面に倒れた。起き上がる間もなく、無慈悲な足が幾度も蹴りつける

気がつくくと、彼は大きく開いた門の前に立っていた。門の奥には、地獄が広がっている。

恐怖に駆られ、彼は背後の馬頭羅刹を振り仰ぐ。そして、恐ろしさに涙を流しながら、問う。

「なぜ、わたしが」

問いかける彼を、無慈悲な馬頭羅刹が、無言で睨み付けていた

なぜ、と問う沙門を、馬頭羅刹である彼は無言で睨み付けた。

ここに来る罪人どもは、戯れに禽獣を痛め傷つけ、羽や毛を雀り抜いたものどもだ。おそらくはこの沙門とて、たかが禽獣と戯れに痛めつけ、戯れのこととて覚えてさえいないのだろう。

無慈悲な者にかける慈悲はない

彼は沙門を地獄の門へと追い立てた。沙門は諦めたか、よろめき歩いて門をくぐる。彼もまた、沙門を追って門をくぐった。

悲鳴が、響いた。沙門の悲鳴である。

地獄の地面は鋭い鉄棘に覆われている。両足を貫かれ悲鳴を上げて立ち尽くす沙門は、しかしすぐに叫び喚きながら走り出す。

沙門に、飛火がまとわりつき、その身を焼いている。ふわり、ふわりと飛び来る火は、まるで戯れるかのように、あるいはその目から入り、口から出る。東に走れば東へ回り、西に馳せれば元に戻って顔を焼く。

炎に弄られ、泣き叫ぶ沙門の様をしばらく眺め、馬頭羅刹は逃げ

惑う沙門の頭を、ぐいと捕らえる。死の間際剃髪も儘ならなかったのか、その頭には少しばかり毛が伸びかけている。

怯えた目を向ける沙門を、冷たく睨んで、馬頭羅刹はまだ短いその頭髪を、両手で一息に篦り取った。

ぎゃあああつ

沙門が叫ぶ。

皮毛が剥け、血が流れ出る

苦痛にうづくまる沙門に、馬頭羅刹は背を向けた。血の臭いに誘われた狗や餓鬼が、集まって来る。沙門はすぐに彼らに喰われてしまっただろう。

戯れに傷つけられ、羽を篦られた禽獣も、いずれ同じような運命であったかもしれない。

背後では、沙門の叫び声が、まだ響いていた

餓鬼や狗が、沙門達に群がる様を見た寶達は、沈痛な面持ちで、静かに目を閉じた。

「哀れなものです。」

鬼王がぼつりと言う。

「彼らは一日一夜にあのような、例えようなない罰を受けます。無論、死にたくても死ねず、千万劫を経ても、報いを受け終わることがないでしょう。この後、地獄を出ることがあっても、常に畜生の身となって苦しむのです。」

「畜生に」

寶達が、目を上げる。

「彼らは、一体何をしたのでしょう。」

悲しげな寶達の言葉に、馬頭羅刹が答える。

「お答えいたします。この罪人どもは、仏の禁戒を受け沙門となりながら、その心に真の慈悲を持たず、楽しみのために禽獣の毛を抜き、傷つけるなど慈しみの心を持たなかった者どもでございます。」

この者どもにはほんの戯れでも、捕らわれたものは恐れ怯え、生きた心地もしなかったこととでございましょう。そのようなことを思いやることもなく、慈悲みの心を持たぬことを恥じる気持ちもない者でしたので、今この地獄に墮ち苦しみを受けているのです。」

「 自業自得、ですか。」

寶達が、悲しげに呟く。

鬼王は静かに、はい、と答えた。

寶達の頬を涙が濡らした。寶達は、静かにその地を去った。

仏説仏名經卷第三十 大乘蓮華寶達問答報応沙門經

高い、樓閣の上に、寶達は立っていた。

眼下には、沢山の地獄が広がっている。

「このように、地獄は無量にございます。」

馬頭羅刹が言った。

「もしここに沙門があつて、不浄の履物で清浄な香室を踏みつけるなら、その沙門は鉄「金*疾」「金*離」地獄に堕ちます。心に怒りを持ち、悪念を持って師に手を上げれば燃手脚地獄に、悪言を発して師を罵れば銅狗地獄に堕ちるでしょう。また、心に慈悲のない沙門があつて、生き物を煮て食べれば鉄山地獄に堕ちます。」

「寶達様」

鬼王が言う。

「罪の報いは皆このように、確実にやってくるのです。」

寶達は、涙を流した。

地獄という世界。そして、仏の浄戒を受けたはずの沙門達が、これほど沢山ここへ堕ちてくるという事実。

寶達が知らなかっただけで、世は憂いと悲しみに満ちていたのだ

寶達は悲しみに打ち震えながら、世尊の待つ摩竭道場へと戻った。

世尊は、変わらず憂いを湛えたまま、静かに座っていた。逸る心を抑えて寶達は世尊を礼拝し、その前に立った。

「世尊」

涙を流したまま立ち尽くす寶達を、世尊は静かに見つめている。

「世尊、私は 地獄を見ました。」

きっぱりと言う寶達に、集う衆生がざわめく。

「この東方の、鉄圍山の間には、無量の地獄があつて」

そう言つと、沙門達の苦しむ様が、脳裏にありありとよみがえり、
寶達は言葉を切る。

「世尊、私は」

堰を切つたように、寶達の瞳から涙が溢れ出した。

「私は 彼らを救うために、なにができるのでしょうか」

寶達は、泣き伏す。

己の無知さに、己の無力さに、滂沱の涙を流す。

世尊は悪行の沙門達を憂っていたのではない。その現状を知らず、
地獄という世界を知らず、苦報を知らず、悲しみを知らない寶達等
衆生をこそ、世尊は憂っていたのだ

摩竭道場へ集つ、すべての衆生がざわめく。

彼らの多くも、寶達同様、悲しみを知らない。

長い間、世尊は悲しみ泣く寶達を、静かに見つめていた。そして、
寶達の涙が枯れるころ、静かに言った。

「寶達よ。」

ざわめきが、引いてゆく。

「寶達よ。私の憂いの理由が解つたか。」

「はい」

答える寶達に、世尊は静かに頷いて言った。

「ならば寶達よ、お前はお前の神通力をもって、彼らを悉く救うこ
とができるだろう。」

寶達は、困惑して世尊を見上げる。

「世尊 わたくしには、その力がないのです。」

悲しげに項垂れる寶達を、世尊は笑う。

「寶達よ。お前はすでに立派な神通力を持っているではないか。お
前は地獄へ赴き、法を説くがいい。罪を知り、苦報を知り、憂いを
知り、悲しみを知つたお前の言葉は、彼らに届くだろう。法を聞き、
法を知る者は皆救われる。地獄の苦惱は消え去り、やがて彼らは、
悉く救われるであろう。」

そう言つと、世尊は驚く寶達に微笑みかけて、立ち上がった。そ

の顔からは憂いが消えている。

「寶達よ、ともに往こう。私は彼らに法を説き、道を得させよう。ここに集うものたちよ、皆ともに来て見るがよい。」

世尊がそういうと、一同はすでに地獄に立っていた。地獄を治める三十六王が、啞然として彼らを迎える。

寶達は、眼下の地獄を見渡す。そこには、相変わらず苦悩に喘ぐ沙門達がひしめいていた。

「王方、そして罪人達よ。」

寶達は、見違えるように憂いのない顔で語りかける。

「今ここに、三界に尊き御方がおいでになりました。その大悲は普く一切を照らし、三界に届かぬところはない御方、世尊がここにおいでです。」

おお、と大地がざわめいた。

王達も、夜叉羅刹の獄卒達も、苦悩に喘ぐ沙門達でさえ、皆その言葉を聞いて顔を上げ、光り輝く世尊の姿を見た。驚きのざわめきは、やがて歓喜のどよめきに変わった。

寶達の心にも喜びがあふれ、笑みがこぼれる。

世尊は傍らの寶達を見つめ、静かに微笑んだ。

「誰も皆、隔てなく集うがよい。」

世尊の言葉に、その場の誰もが世尊と、そして寶達に向かった。

地獄はすでに、苦悩の地ではなくなり、その場に集うすべての者が、心安らかに世尊の説く法を聞き、悟りへの道を得た。

安らかな笑顔が並んでいるのを、寶達は見た。その中には、鬼王の顔も、馬頭羅刹達の顔もある。これは、始りに過ぎないのだろう。しかし、彼らを見つめる寶達の顔もまた、安らかであった。

経典は伝える。

この時、二万の比丘が阿羅漢道を得、五千の比丘尼が須陀& a m p : # 27961 : 果を得、六千の王子は法眼淨を得、八百の女人

は三禅心を得、天龍、鬼神さえも言ばぬものはなく去ったと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0976g/>

勝手に私訳『寶達問答報応沙門経』

2010年10月8日15時55分発行